

コピュラ動詞の統語的役割とコピュラ文の統語派生

－コピュラ機能の通言語学的研究に向けて－

広島大学

上野 貴史

1. はじめに

主語 (Subject) と述語 (Predicate) を連結させる構造は、世界のどの言語にも存在する。このような構造から生成される文は一般的にコピュラ文 (copular sentence) と呼ばれるが、コピュラ文にあるコピュラ機能がどのようなものであるのかということについては古くから数多くの研究がある。Moro (1997) では、その主たるものに、1) 時制 (tense) の標識 (アリストテレス理論)、2) 断言 (affirmation) の標識 (アベラルド理論)、3) 同一性 (identity) の標識 (ラッセル理論) があると述べられているが、個々の理論で完全にコピュラ機能というものが説明できるわけではなく、すべての理論を併せ持ったようなものがコピュラ機能であると位置づけているのが現状であろう。このように、コピュラ機能が一元的に捉えられない理由は、「どのようなものをコピュラとするか」という定義の問題と、「コピュラはどのような働きをするのか」という機能の問題に様々な考え方が存在していることにあるように思われる。

例えば、英語の *be* やフランス語の *être* がコピュラ動詞であるというのは容易に認識できるが、世界の言語にはコピュラ動詞を形式として有しない言語が数多く存在する¹⁾。それでは、このような音形としてコピュラ動詞を有していない言語にはコピュラ機能が存在しないのだろうか？さらに、時制によってコピュラ動詞が出現したりしなかったりする言語も存在する (コピュラ脱落 (copula dropping))。例えば、ロシア語の現在時制においては音形のあるコピュラ動詞が出現することはないが、過去時制ではコピュラ動詞 *был* が義務的に現れる。ロシア語では、このような時制に応じてコピュラ動詞の出現の有無が見られるが、これは時制によってコピュラ機能が異なるということを意味しているのであろうか？

このようなこれまでのコピュラ研究の問題点は、明示的に出現するコピュラ動詞に焦点を当てコピュラ機能を考察している点にあるように思われる。コピュラ動詞が音形として現れない言語においても、主語と述語を結合させるコピュラ文は存在するし、そこにはコピュラ機能が働いている。そこで本稿では、音形のあるなしに係わらずコピュラ文にはコピュラ動

¹⁾ Pustet (2003: 71) で調査されている言語において、31.5% の言語が音形としてコピュラ動詞を有していない。

- (2) a. *Fr.* Antonella *est* très bonne.
 b. *It.* Antonella *è* molto brava.
 c. *Sp.* Antonella *es* muy buena.⁴⁾

Antonella be_{C, Sg.3, Pres} very good_{Sg.F}

「アントネッラはとても優秀だ」

(2)におけるコピュラ動詞 *est/è/es* の統語的役割は、主語 *Antonella* と述語 *bonne/brava/buena* を「結合」(link) させることと、主語 *Antonella* の「単数」と「女性」という素性を述語形容詞 *bonne/brava/buena* と「一致」(agreement) させていることのように見える。しかしながら、果たしてこのような「主述の結合」と「主述の一致」は、コピュラ動詞によって生じるものであろうか？ 確かに、ロマンス語においては、コピュラ動詞の前後に主語と述語が配置され、「主述の結合」がコピュラ動詞によって行われているように見える。しかし、コピュラ文が小節 (small clause) として認識動詞 (epistemic verb) の補部 (complement) の位置に埋め込まれた場合 (<認識動詞+小節>)、小節にはコピュラ動詞が存在しないにも係わらず主語と述語は連続して現れる。

- (3) a. *Fr.* Je croyais [Pierre le mari de Suzy].

I believe_{C, Sg.1, Imp} Pierre the husband of Suzy

「私はピエールがスージーの夫だと思っていた」

(Jones 1996: 73)

- b. *It.* Considera [Gianni il mio miglior amico].

believe_{C, Sg.3, Pres} Gianni the my best friend

「彼はジャンニが私の最良の友人だと思っている」

(3)の小節では、主語である *Pierre/Gianni* のすぐ後に述語 *il mari de Suzy/il mio miglior amico* が連続して現れている。このように、コピュラ動詞が構造内に存在しなくても主語と述語が結び付くということは、「主述の結合」という機能はコピュラ動詞によるものではないということになる。

また、「主述の一致」に関しても、このような一致は述語が AP であるときにだけ生じるもので、述語が DP である (4) のような場合には「主述の一致」は起こらない。

⁴⁾ スペイン語には *ser* の他に、*estar* というコピュラ動詞がある。一般的に、*ser* は (2) で取り上げた他の言語と同様、「性質」を表すのに対して、*estar* は「状態」を表すとされる。従って、*estar* を使った *Antonella está muy buena.* は、「アントネッラはとても優秀であるように見える」といったような意味になる。

- (4) a. *Fr.* Les boss de la mafia sont notre plus gros problème.
 b. *It.* I boss mafiosi sono il nostro problema più grande
 c. *Sp.* Los capos mafiosos son nuestro mayor problema. (Arche 2018: 24)
 the bosses_{PLM} (of the) mafia be_{PL.3.Pres} (the) our biggest problem_{SGM}
 「マフィアのボスたちが我々の最大の悩みの種だ」

(4)においては、主語 DP₁が「複数・男性」という素性を持つものに対して、述語 DP₂が「単数・男性」という素性を持ち、主語と述語において素性の一致は見られない。このようなことから、「主述の一致」は、コピュラ動詞が関与するものではないということが指摘できると思われる⁵⁾。

以上のことから、一般的にコピュラ動詞の役割とされる「主述の結合」と「主述の一致」はコピュラ動詞に因るものではなく、別の何らかの操作に依存しているということが言えるであろう。それでは、コピュラ動詞の役割とはどのようなものであろうか？このことを次節で考察していくことにする。

2.2. 「倒置構造の派生」と「時制の標示」

本節では、コピュラ動詞の役割が「倒置構造の派生」・「時制の標示」・「述語への格付与」であるということをロマンス語と、脱コピュラ現象が生じるロシア語とアラビア語から考察する。

2.2.1 ロマンス語

まず、フランス語 ((5)) とイタリア語 ((6)) に見られる二種類のコピュラ文を取り上げてみる。

- (5) *Fr.* a. Pierre est le mari de Suzy.
 Pierre be_{SG.3.Pres} the husband of Suzy
 「ピエールはスージーの夫だ」
 b. Le mari de Suzy est Pierre.⁶⁾
 「スージーの夫はピエールだ」 (Jones 1996: 68)

⁵⁾ 主語 DP と述語 AP に見られる一致は、探索子 (probe) としての主語 DP が目標子 (goal) である述語 AP を探して一致している。

⁶⁾ フランス語の倒置構造においては、*Le mari de Suzy c'est Pierre.* というように指示代名詞 *ce* を加えた構造で使用される方が一般的である。指示代名詞 *ce* が出現するコピュラ文の構造は、本稿で扱う構造とは異なる派生によって生成されると考えられるが、このことについてはまた別の機会に触れたい。

(6) *It. a. Gianni è il mio miglior amico.*

Gianni *be*_{sg,3,Pres} the my best friend
「ジャンニは私の最良の友人だ」

b. *Il mio miglior amico è Gianni.*

「私の最良の友人はジャンニだ」

(Shlonsky & Rizzi 2018: 42)

(5a)・(6a)は、指示的 (referential) 主語 DP₁である *Pierre/Gianni* と、叙述的 (predicative) 述語 DP₂である *le mari de Suzy/il mio miglior amico* からなる、主語に何らかの特性を帰すような指定位文 (predicational sentence) と呼ばれるものである。一方、(5b)・(6b)は、この指定位文の主語 DP₁と述語 DP₂を倒置したものであり、ある特性を記述する指示的 DP₂である *le mari de Suzy/il mio miglior amico* が指定位 (specificational) DP₁である *Pierre/Gianni* を特定する指定位文 (specificational sentence) と呼ばれるものである⁷⁾。このようなコピュラ文が<認識動詞+小節>の小節の中に現れる場合、(7a)・(8a)のような指定位構造では文法的となるが、(7b)・(8b)のような倒置構造では容認されない。

(7) *Fr. a. Je croyais [Pierre ___ le mari de Suzy].* (= (3a))

b. **Je croyais [le mari de Suzy ___ Pierre].*

(Jones 1996: 73)

(8) *It. a. Considera [Gianni ___ il mio miglior amico].* (= (3b))

b. **Considera [il mio miglior amico ___ Gianni].*

コピュラ構造と小節構造は類似した構造を形成していると考えられるが、コピュラ構造には明示的なコピュラ動詞が出現し、小節構造にはコピュラ動詞が現れないという点において二つの構造は異なる。(7b)・(8b)のような小節において倒置構造が容認されないのは、このコピュラ動詞が小節構造に存在しないことが起因しているのではないかと考えられる。逆に言えば、(5b)・(6b)のようなコピュラ構造において倒置コピュラ文が容認されるのは、コピュラ動詞が出現しているからであるとも言える。このことから、コピュラ動詞には「倒置構造の派生」という統語的役割があることが示唆される。コピュラ動詞に「倒置構造の派生」という統語的役割があるということは、(9a)のように、英語の小節構造にコピュラ動詞が出現すると倒置構造が容認されるということからも理解できる⁸⁾。

⁷⁾ Higgins (1979) に始まるコピュラ文の分類は、Predicational, Specificational, Equative, Identificational の4タイプであるが、本稿ではこの中の Specificational タイプの構造を倒置コピュラ文と呼んでいる。

⁸⁾ 英語の認識動詞は、明示的主語を持つ不定詞補部である「不定詞付き対格」(accusative with infinitive) 構造を取ることが可能であるが、イタリア語やフランス語の認識動詞は非定形従属節に動詞が出現する場合、コントロール動詞 (control verb) となるため、そもそも小節にコピュラ動詞を置くことができない。

(i) **Je crois [Pierre être le meilleur candidat].*

I believe Pierre *be*_{inf} the best candidate

(Jones 1996: 73)

- (9) a. John considers [the cause of the riot to *be* a picture of the wall].
 b. *John considers [the cause of the riot ___ a picture of the wall]. (Moro 1995: 37)

このように、ロマンス語の小節が倒置構造を容認しないことや、英語の小節においてコピュラ動詞 *be* が出現すると倒置構造が容認されるといった現象から、コピュラ動詞は「倒置構造の派生」という統語的役割を持つということが指摘できる。

2.2.2 脱コピュラ現象のある言語

前節ではロマンス語で見られる倒置構造からコピュラ動詞の統語的役割が「倒置構造の派生」であることを指摘したが、ここでは脱コピュラ現象が生じるロシア語とアラビア語における倒置構造の派生から「時制の標示」の問題について考察を加える。

ロシア語やアラビア語のコピュラ文では、現在時制において明示的なコピュラ動詞が出現することはないが、過去時制においてはロシア語で *byt'*、アラビア語で *KWN*⁹⁾ というコピュラ動詞が出現する¹⁰⁾。

- (10) *Rus.* a. Raskol'nikov ___ ubijca.
 Raskolnikov_{Nom} murderer_{Nom}
 「ラスコルニコフは殺人者だ」 (Geist 2008: 97)
 b. Raskol'nikov *byl* ubijcej.
 Raskolnikov_{Nom} *be*_{Sg.3.Past} murderer_{Instr}
 「ラスコルニコフは殺人者だった」
- (11) *Arab.* a. Zayd-un ___ (huwa)¹¹⁾ l-malik-u.
 Zayd_{Nom} (huwa) the-king_{Nom}
 「ザイドは王様だ」 (Alharbi 2017: 75)
 b. *kaan-a* Zayd-un (huwa) l-malik-a.
*be*_{Sg.3.Past} Zayd_{Nom} (huwa) the-king_{Acc}
 「ザイドは王様だった」 (Alharbi 2020: 22)

このようなコピュラ脱落現象が時制によって生じるロシア語¹²⁾ やアラビア語では、コピュラ

⁹⁾ *kaana* の活用していない形態を *KWN* として記す。

¹⁰⁾ アラビア語では、現在時制の否定コピュラ文においてコピュラ動詞が出現する。Cf. Arche (2019)。

¹¹⁾ (11)に見られる三人称人稱代名詞 *huwa* は、アラビア語の指定文において選択的に出現する代名詞的要素 (pronominal pronoun) である。

¹²⁾ 同定文 (identificational) の派生において、ロシア語では中性・単数の指示代名詞である *eto* という代名詞的要素、アラビア語では三人称の人稱代名詞 *huwa* が義務的に生じる。

(i) *Rus.* Mark Twain * (*eto*) Samuel Clemens.
 Mark Twain_{Nom} this Samuel Clemens_{Nom}
 「マーク・トゥエインはサミュエル・クレメンズだ」 (Geist 2008: 89)

動詞が出現する過去時制だけでなく、現在時制においても倒置構造が容認される。

- (12) *Rus.* a. Ubijca ___ Raskol'nikov.
 murderer_{Nom} Raskolnikov_{Nom}
 「殺人者はラスコルニコフだ」 (Geist 2008: 97)
- b. Ubijcej byl Raskol'nikov.
 murderer_{Instr} be_{Sg.3.Past} Raskolnikov_{Nom}
 「殺人者はラスコルニコフだった」 (Geist 2008: 96)
- (13) *Arab.* a. ?al-malik-u ___ (huwa) Zayd-un.
 the-king_{Nom} (huwa) Zayd_{Nom}
 「王様はザイドだ」 (Alharbi 2017: 74)
- b. kaan-a ?al-malik-u (huwa) Zayd-an.
 be_{Sg.3.Past} the-king_{Nom} (huwa) Zayd_{Nom}
 「王様はザイドだった」

過去時制である (12b) と (13b) においては、コピュラ動詞 *byl/kaana* が明示的に出現しており、ロマンス語と同様、このコピュラ動詞の存在によって倒置コピュラ文が派生されるものと考えられる。しかしながら、現在時制である (12a) と (13a) においても、顕在的なコピュラ動詞がないにも係わらず倒置コピュラ文が派生している。このことはどのように考えれば良いであろうか？前節のロマンス語における考察においては、「倒置構造の派生」がコピュラ動詞の統語的役割であることを指摘した。この仮説が正しいものであると考え、ロシア語やアラビア語で現在時制コピュラ文の倒置構造が容認されていることは、この構造内に何らかのコピュラ動詞が存在することを示していることになる。本稿ではこの音形のないコピュラ動詞をゼロコピュラ動詞 ϕ として分析を進めていくことにする。

ここで、(10) から (13) の (倒置) コピュラ文にゼロコピュラ動詞 ϕ を表示して再掲してみる。

- (14) *Rus.* a. Raskol'nikov ϕ ubijca. (= (10a))
 b. Raskol'nikov byl ubijcej. (= (10b))
 c. Ubijca ϕ Raskol'nikov. (= (12a))
 d. Ubijcej byl Raskol'nikov. (= (12b))

(ii) *Arab.* Michel Chalhoub *(huwa) Omar-u š-šariif.

Michel Chalhoub he Omar_{Nom} the-šariif

「ミシェル・シャルフープはオマル・シャリーフだ」

(Alharbi 2020: 21)

Geist & Blaszczak (2000) や Geist (2008) では、同定文の構造は主語 DP を Topic とした疑似分裂文構造であり、この Topic と述語を繋げるために代名詞的要素が生じるとしている。このような代名詞的要素が出現する言語は、ロシア語やアラビア語の他に、スコットランド・ゲール語、現代ヘブライ語などがある。

- (15) Arab. a. ϕ Zayd-un l-malik-u. (= (11a))
 b. *kaan-a* Zayd-un l-malik-a. (= (11b))
 c. ϕ ?al-malik-u Zayd-un. (= (13a))
 d. *kaan-a* ?al-malik-u Zayd-an. (= (13b))

ゼロコピュラ動詞 ϕ が音形のあるコピュラ動詞である *byr'/KWN* と同じ位置に出現し、「倒置構造の派生」の機能を果たしているとする、この二種類のコピュラ動詞が示す異なる統語的役割は時制の対立ということになる。つまり、ゼロコピュラ動詞 ϕ が「現在」時制を標示し、音形のあるコピュラ動詞 *byr'/KWN* が「過去」時制を標示する。このことから、コピュラ動詞には「時制の標示」という統語的役割があると言える。このような「時制の標示」は、英語やロマンス語では形態の相違によって示されるが、脱コピュラ現象のあるロシア語やアラビア語では音形のあるなしで表出する。以上のことから、コピュラ動詞には「倒置構造の派生」に加えて「時制の標示」という統語的役割があると言える。

このような音形のないコピュラ動詞は、ロシア語とアラビア語の〈認識動詞+小節〉の小節構造の中にも存在する。英語やロマンス語と違って、脱コピュラ現象が生じるロシア語やアラビア語は、〈認識動詞+小節〉の小節構造においてコピュラ動詞が存在しないにも係わらず倒置構造を容認する。

- (16) Rus. a. Ja sčitaju [Gumilëva __ xorošim poëtom].
 I consider_{Sg.1.Pres} Gumilëv_{.Acc} good poet_{Instr}
 「私はグミレフを良い詩人だと思っている」 (Matushansky 2000: 291)
- b. Ja sčitála [xorošim poëtom __ Gumilëva].
 I consider_{Sg.1.Past} good poet_{Instr} Gumilëv_{.Acc}
 「私は良い詩人がグミレフだと思っている」 (Matushansky 2000: 292)
- (17) Arab. a. šadad-tu [Zayd-an __ l-faaʔiz-a].
 consider_{Sg.1.Past} Zayd_{.Acc} the-winner_{.Acc}
 「私はザイドを勝者だと思っている」 (Alharbi 2017: 84)
- b. šadad-tu [l-faaʔiz-a __ Zayd-an].
 consider_{Sg.1.Past} the-winner_{.Acc} Zayd_{.Acc}
 「私は勝者がザイドだと思っている」 (Alharbi 2017: 84)

(16b) では、ロシア語の認識動詞 *sčitat'* の補部に埋め込まれた小節構造において、主語 *Gumilëva* と述語 *xorošim poëtom* が倒置されている。同様に、(17b) は、アラビア語における認識動詞 *šadadtu* の補部小節において、主語 *Zayd-an* と述語 *l-faaʔiz-a* が倒置されている。いずれの言語においても、小節内に明示的なコピュラ動詞が存在しないにも係わらず倒置構造が容認される。本稿で主張している「倒置構造の派生はコピュラ動詞の存在による」ということ

に沿ってこのことを考えてみると、ロシア語やアラビア語の小節には何らかのコピュラ動詞が構造内に存在するということになる。本稿ではこの小節内にある音形のないゼロコピュラ動詞をコピュラ動詞 \emptyset として分析を行うことにする¹³⁾。このコピュラ動詞 \emptyset は、現在時制コピュラ文に現れるゼロコピュラ動詞 \emptyset とは異なる。コピュラ動詞 \emptyset は、TP を構造内に有する定形節 (finite clause) に出現するもので、現在時制を標示する定形節コピュラ動詞である。一方、コピュラ動詞 \emptyset は、認識動詞の補部である小節に現れることから分かるように、TP を持たない非定形節 (non-finite clause) に出現する非定形節コピュラ動詞である。

このコピュラ動詞 \emptyset を明示して (16)・(17) を書き換えたものが (18)・(19) である。

(18) *Rus.* a. Ja sčitaju [Gumilëva \emptyset xorošim poëtom]. (= (16a))

b. Ja sčitala [xorošim poëtom \emptyset Gumilëva]. (= (16b))

(19) *Arab.* a. řadad-tu [Zayd-an \emptyset l-faařiz-a]. (= (17a))

b. řadad-tu [l-faařiz-a \emptyset Zayd-an]. (= (17b))

ここまで、ロシア語とアラビア語の〈認識動詞+小節〉の小節には非定形節コピュラ動詞 \emptyset があり、このコピュラ動詞 \emptyset によって小節内の倒置構造が派生できるということを見てきた。しかしながら、英語やロマンス語ではこのような小節内の倒置構造が容認されない。

(20) a. *Eng.* *I consider [the best superhero Superman]. (Arche 2018: 22)

b. *Fr.* *Je croyais [le mari de Suzy Pierre]. (= (7b))

c. *It.* *Considera [il mio miglior amico Gianni]. (= (8b))

英語では、(20a) のように、明示的なコピュラ動詞がない場合は非文法的となるが、コピュラ動詞 *be* が出現すると小節の倒置構造は容認される (21)。

(21) I consider [the best superhero to *be* Superman]. (Arche 2018: 22、一部改変)

このことは、英語にはコピュラ動詞 \emptyset が存在せず、倒置構造を派生するためには、明示的に定形節コピュラ動詞と同形のコピュラ動詞 *be* の出現が必要であるということを示している。

次に、ロマンス語で小節内の倒置構造を容認しないことに関して、Jones (1996) は、認識動詞の補部に非定形節を持つ構造 (〈認識動詞+非定形節〉) の補部は小節ではなく、コント

¹³⁾ Matushansky (2000: 291) においても、“small clauses contain a null lexical head” という記述がある。この “a null lexical head” (ゼロ語彙的主要部) が本稿のコピュラ動詞 \emptyset に相当するものと思われる。

ロール動詞 (control verb) の項 (argument)¹⁴⁾ であると述べている。

- (22) Marie. *croit* [PRO: *être malade*]. (Jones 1996: 414、一部改変)
 Marie *believe*_{Sg.3} PRO *be*_{Inf} *sick*
 「マリーは病気だと思っている」

(22) は、認識動詞 *croit* が非定形節の主語をコントロールし、主節の主語と同一指標 (coindex) を与えるコントロール構造となっている。このことは、(23) のように非定形節の主語位置に明示的な主語 *Suzy* を挿入して小節構造にすると、非定形節の主語 *Suzy* に格が与えられず非文法的となることから理解できる。

- (23) *Marie *estime* [Suzy *être intelligente*]. (Jones 1996: 415)
 Marie *estimate*_{Sg.3} Suzy *be*_{Inf} *intelligent*

このように、フランス語では<認識動詞+非定形節>の構造がコントロール構造となるため、非定形節の主語は主節の主語にコントロールされる必要が出てくる。このようなことは、フランス語以外のロマンス語でも同様であり、構造上、ロマンス語において認識動詞の補部である非定形節が倒置構造になることはない。

2.3. 「述語への格付与」

本稿で取り上げている言語の中で非定形節コピュラ動詞 \emptyset が出現する言語は、述語に明示的な格標示が行われる言語である。このことから、非定形節コピュラ動詞 \emptyset の出現は述語の格標示と何らかの関係があると思われる。

- (24) a. *Rus.* Ja *sčitaju* [Gumilëva \emptyset *xorošim poëtom*_[Instr]]. (= (18a))
 b. *Arab.* *šadad-tu* [Zayd-an \emptyset *l-faaʔiz-a*_[Acc]]. (= (19a))

(24) のように、<認識動詞+小節>構造における小節述語は、ロシア語で具格、アラビア語で対格が標示される。このような述語 DP₂ の格標示は、(25) で示すように、過去時制コピュラ文と同じ格標示になる。

¹⁴⁾ この項は CP である。

- (25) a. *Rus.* Raskol'nikov byl ubijcej_[Instr]. (= (10b))
 b. *Arab.* kaan-a Zayd-un l-malik-a_[Acc]. (= (11b))

第3章で詳説するが、本稿では、コピュラ動詞は述語 DP₂に格付与を行う位置である vP の主要部 v⁰で併合されるものと考えている。このことから、ロシア語やアラビア語における述語 DP₂の格は、v⁰にあるコピュラ動詞から付与されていることになる。このように、ロシア語とアラビア語における非定形コピュラ動詞 ϕ と過去時制コピュラ動詞 *byt'/KWN* は、(24) と (25) で示したように、述語 DP₂に格を付与する能力を有していることになるが、現在時制コピュラ動詞 ϕ は述語 DP₂に格付与をする能力を持たない。

- (26) *Rus.* a. Raskol'nikov ϕ ubijca_[Nom]. (= (14a))
Arab. b. ϕ Zayd-un l-malik-u_[Nom]. (= (15a))

(26) で示したように、現在時制コピュラ動詞 ϕ が出現する述語 DP₂には主格が標示される。過去時制コピュラ動詞 *byt'/KWN* が述語 DP₂に具格（ロシア語）や対格（アラビア語）を付与していながら、現在時制コピュラ動詞 ϕ がそれらとは異なる主格を付与するということは考えられない。このため、現在時制の述語 DP₂の主格は、コピュラ動詞 ϕ が付与しているものではなく、デフォルトの格である主格が標示されていると考えるべきであろう。このことから、現在時制コピュラ動詞 ϕ は、「倒置構造の派生」や「時制の標示」などの統語的役割は有するが、「述語への格付与」の能力を持たないコピュラ動詞であると言える。

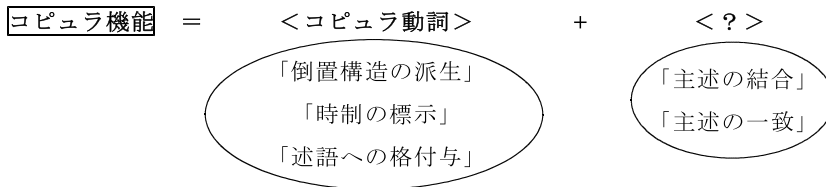
本節では、脱コピュラ現象が生じる言語において、顕在的なコピュラ動詞が欠落していても「倒置構造の派生」が行われることから、これらの構造内にはゼロコピュラ動詞が存在しているということを主張した。ここで、本稿で取り上げている言語の「コピュラ動詞の形式」と「標示される時制」の関係を示すと<表1>のようになる。

<表1：「コピュラ動詞の形式」と「標示される時制」>

		英語	ロマンス語	ロシア語	アラビア語
定形節	現在時制	<i>be</i>	<i>ESSE</i> ¹⁵⁾	ϕ	ϕ
	現在時制			<i>byt'</i>	<i>KWN</i>
非定形節		<i>be</i>	—	ϕ	ϕ

¹⁵⁾ ロマンス語における音形のあるコピュラ動詞を *ESSE* として示す。

また本節では、五つあるコピュラ機能の中でコピュラ動詞がどの役割を担うかについて考察した。その結果、コピュラ動詞の統語的役割は、「倒置構造の派生」、「時制の標示」、「述語への格付与」というものであることを示した。ここまでで考察できたコピュラ機能の総体を<図1>のように示す。



<図1：コピュラ機能>

次節では、ここで考察したコピュラ動詞の統語的役割が、統語構造におけるどの位置で行われるかを考察すると共に、コピュラ動詞の役割ではない「主述の結合」と「主述の一致」がどのように行われるかを分析していく。

3. コピュラ文の派生

コピュラ動詞の出現位置に関しては、コピュラ動詞には意味があるのか、また、コピュラ動詞は完全動詞 (full verb) と同じ機能を行うのか、などといった点からこれまで多くの議論がある。このような議論においては、①「vPの上」、②「vPの下」、③「vP」、といったような場所が、コピュラ動詞の出現する位置として提案されている。このようにコピュラ動詞の出現位置に相違が出る最大の問題点は、コピュラ文に見られる機能全体をコピュラ動詞だけで解決しようとしていることにあるように思われる。前節で考察したように、本稿で考えるコピュラ動詞の統語的役割は、「統語構造の派生」・「時制の標示」・「述語への格付与」である。本節では、これらのコピュラ動詞が持つ統語的役割に焦点を当て、コピュラ動詞の出現位置を考察してみる。

まず、①の「vPの上」というのはTPのことであるが、これはコピュラ動詞自体に意味がなく、コピュラ動詞が屈折操作だけに関与する機能的語彙である、という立場に基づくものである。本稿では2.1.節で「主述の一致」はコピュラ動詞の統語的役割ではないという指摘を行っているため、コピュラ動詞がTPで出現するという考え方には否定的である。次に、②の「vPの下」は Baker (2003) が PredP と呼んでいる位置であり、主語と述語の叙述関係を確立する場所である。この叙述関係というのは、2.1.節でコピュラ動詞の統語的役割ではないと指摘した「主述の結合」に相当するものである。従って、コピュラ動詞がこの PredP に出現するということには同意できない。しかしながら、コピュラ文は間違いなく「主述の結

合」が行われている。このことから、PredP という機能句はコピュラ構造内に投射されるものであると考える。最後に、③の「vP」は、他動詞であれば目的語に対格を与える位置である。このことは、ロシア語やアラビア語の述語 DP₂に具格や対格を付与していることと合致する。このことから、本稿では、コピュラ動詞が vP に位置し、その下に「主述の結合」が行われる PredP が配置される (27) のようなコピュラ構造を設定する。

(27) TP - vP - PredP

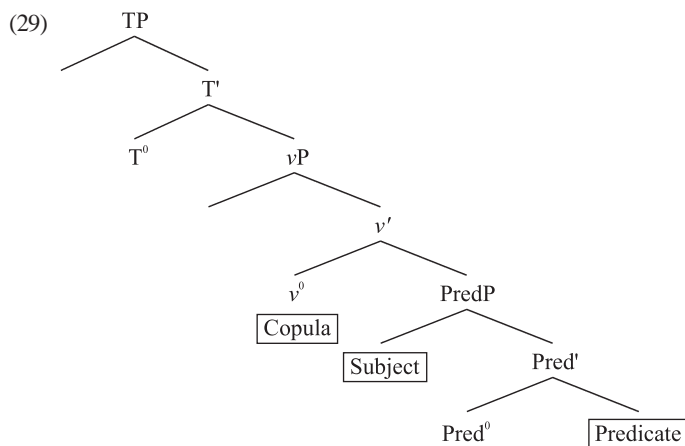
ここで問題となるのは、「主述の結合」が行われる場所である PredP が主要部 (head) を持つかどうかということである。主要部が投射されない場合は、(28a) で示すような主語と述語を対称的に配置する構造となるが、主要部が投射される場合は、(28b) のような X バー理論に基づく非対称的な構造となる。

(28) a. [_{XP} Copula [_{YP} Subject Predicate]]

b. [_{XP} Copula [_{YP} Subject Y [Predicate]]]

本稿の立場では、PredP で「主述の結合」が行われることから、YP の主要部にはその結合を行わせる機能的素性 (feature) があると仮定している。このため、コピュラ構造は、統語構造全体が一様に X 構造となる (28b) のような非対称的構造になると考える。

ここで、本稿で分析するコピュラ文の統語構造を提示する ((29))。



(29) の統語構造では、PredP の指定部に主語、補部に述語が併合し、その後、コピュラ動詞が v⁰ に投射されている。このような構造は一般的に小節構造と呼ばれるが、小節構造は vP

の位置でコンピュータ動詞が併合するため、VPで併合される完全動詞の統語構造とは機能面において異なる様相を呈することになる。

次に、(29)の統語構造で(30)のスペイン語のコンピュータ文の派生を考えてみる。

- (30) Los capos mafiosos *son* nuestro mayor problema. (= (4c))
 the bosses mafia_{PL,M} be_{PL,3,Pres} our biggest problema_{SG,M}
 「マフィアのボスたちは我々の最大の問題だ」 (Arche 2018: 24)

- (31) a. [_{VP} Spec *ser* [_{PredP} los capos mafiosos **Pred**⁰ [il nuestro mayor problema]]]
 b. [_{TP} [_{EPP}] [_{VP} los capos mafiosos: *ser* [_{PredP} *t*_i **Pred**⁰ [il nuestro mayor problema]]]]
 c. [_{TP} los capos mafiosos_{i(Nom)} *son*_[PL, 3, Pres] [_{VP} *t*_i ~~*ser*~~ [_{PredP} *t*_i **Pred**⁰ [il nuestro mayor problema]]]]

(31a)は(30)の基底構造であり、PredPの指定部位置に主語DP₁、そして補部位置に述語DP₂が投射され、コンピュータ動詞*ser*がvPの主要部に併合する。このように、小節構造の基底構造には、「主述の結合」が行われるPredPの上にコンピュータ動詞が投射されるvPという階層を成す二つの句がある¹⁶⁾。その後、主語DP₁がvPの指定部に移動し(31b)、さらにTPの指定部に繰り上がることにより、Tにある[EPP]素性により主格が付与される。そして、コンピュータ動詞*ser*がTPの主要部に編入し(incorporate)、主語DP₁の「数」と「人称」の素性を照合すると共に、T⁰の時制素性を照合し*son*という形態として出力する(31c)。このように、主語とコンピュータ動詞の「一致」は、TPにおける「指定部-主要部」関係(Specifier-head configuration)によって行われ、「主述の結合」と同様、コンピュータ動詞が関与するものではない。

次に、＜認識動詞+小節＞における補部の小節構造について考察を加えてみる。2.2.2節において、ロマンス語では小節における倒置構造が容認されないことから、コンピュータ動詞を構造内に持たないということを指摘した。コンピュータ動詞が構造内に存在しないということは、ロマンス語ではvPが併合されないとも考えることができるが、主語DPがvPの指定部に移動することにより述語APとの一致が起こるということを考えると、主要部を空とするvPが構造上必要となる。このようなことから、(32)の＜認識動詞+小節＞の小節における基底構造は(33)のように記述できる。

¹⁶⁾ このような二つの位置にコンピュータ機能があるという本稿での主張は、叙述関係の統語的操作にRELATORSとLINKERSという二つのものがあるというden Dikken(2006)が指摘しているものに近い。den Dikken (2006: 1)のRELATORSは、“the relationship between a predicate and its subject in the base representation of predication structures”であり、これは本稿の「主述の結合」を行うPredPに該当する。また、LINKERSは、“the latter (LINKERS) connect the raised predicate to the small clause harboring its subject in so-called Predicate Inversion constructions”であり、これは本稿のvPの主要部に併合されるコンピュータ動詞に相当する。

(32) Considera [Antonella molto brava].

consider_{Sg.1.Pres.} Antonella very good_{Sg.F}

「私はアントネッラをととても優秀だと思っている」

(33) [_{vP} Spec v^0 [_{PredP} Antonella **Pred**⁰ [molto bravo]]]

(33) の基底構造から、主語 DP が vP の指定部に移動して述語 AP と数と性で一致する。

(34) [_{vP} Antonella_i v^0 [_{PredP} *ti* **Pred**⁰ [molto brava_{(Sg.F)]}]]

最後に、ロマンス語におけるコピュラ動詞の形式ごとの基底構造を一般化して示しておく。

(35) a. 定形節 : [_{vP} Spec ESSE [_{PredP} Subject **Pred**⁰ [Predicate]]]

b. 非定形節 : [_{vP} Spec v^0 [_{PredP} Subject **Pred**⁰ [Predicate]]]

次節では、ロマンス語のコピュラ文の派生とは少し様相が異なるロシア語とアラビア語のコピュラ文の派生を個別に分析していく。

3.1. ロシア語

ロシア語では、現在時制のコピュラ動詞が φ 、過去時制のコピュラ動詞が *byr'* で示される。過去時制におけるコピュラ文において、ロシア語では (36) のように述語の格に二種類のものが現れる。

(36) a. Margarita *byla* studentka.

Margarita be_{Sg.3.F.Past} student_{Nom}

b. Margarita *byla* studentkoj.

Margarita be_{Sg.3.F.Past} student_{Instr}

「マルガリータは良い先生だった」

(Matushansky 2000: 297)

ロシア語の過去時制コピュラ文においては、述語 DP₂ が (36a) のように主格で標示される場合¹⁷⁾ と、(36b) のように具格で現れる場合がある。このことに対して、Pereltsvaig (2001, 2008) では、これらが異なる統語構造から派生することによって述語 DP₂ に異なる格標示が出現するとしている。Pereltsvaig (2008) では、(36b) のように述語に具格が付与されるのは、NP とされるコピュラ後置述語が v^0 にあるコピュラ動詞 *byr'* の項位置にあるといった、主語と述語が非対称的となる構造から派生しているためであるとしている¹⁸⁾。一方、(36a) のような述語

¹⁷⁾ Matushansky (2000: 289) には、主格標示はかなり制限された用法であるとの指摘がある。

¹⁸⁾ Pereltsvaig (2008) で示されている DP₂ に具格を付与するコピュラ構造は、[_{FP} Spec *byr'* [_{vP} DP v^0 [NP]]] というものであり、Pereltsvaig (2008) の FP と vP は、それぞれ本稿の vP と PredP に相当する。

に主格が標示される場合は、コピュラ後置述語である DP¹⁹⁾ が主語 DP と対称的に配置される構造をなしており²⁰⁾、この場合、述語 DP が項とならないのでデフォルトの主格として標示されるとしている²¹⁾。このように、Pereltsvaig (2001, 2008) では、ロシア語の過去時制コピュラ文は二種類の異なる統語構造があり、述語として NP が出現する場合の統語構造においてのみコピュラ動詞が格付与を行うとしている。これは、「同一のコピュラ動詞形態が異なる機能を行うのか」、というような言語学の中で従来より議論されてきた問題に対して、「同一形態のコピュラ動詞が異なる統語構造で派生する」と主張しているものである。この Pereltsvaig (2001, 2008) における「一つのコピュラ動詞が二種類の統語構造で派生する」という考え方は、通言語学的に普遍的なコピュラ構造があり、「一つのコピュラ動詞が一つの統語構造で派生する」と考えている本稿の立場とは大きく異なる。本稿では、普遍的なコピュラ統語構造からの派生プロセスにおいて、保持する素性が異なる二種類の述語句の併合によってこのような二種類の格が標示されるということを提示してみたい。

まず、過去時制におけるロシア語のコピュラ文の基底構造は、(37) のような ν P の主要部にコピュラ動詞 *byt'* が投射される構造となる。

(37) [ν P Spec *byt'* [_{PredP} Subject **Pred**⁰ [Predicate]]]

コピュラ動詞 *byt'* が格付与を行っているのは、述語が NP/AP の場合である。このことから、ロシア語の NP/AP は値未付与 (unvalued) の格素性を持っていると考えられる。コピュラ動詞はこの値未付与の NP/AP を目標子として NP/AP を探索し同定した結果、NP/AP に具格を付与する。一方、主格標示される述語 DP は、ロシア語の場合、格素性を持たない欠格 DP(DP_{def}) であると考えられる。この DP_{def} は格素性を持たないため、デフォルトの主格で標示される²²⁾。

¹⁹⁾ ロシア語には冠詞が存在しないので DP であるのか NP であるのかは表層上判別できないが、Pereltsvaig (2001) では (36b) の述語には指示性 (referentiality) という機能があることから DP であると判断している。これは、冠詞を持つイタリア語に関して、定冠詞のある NP と無冠詞 NP を比較している Renzi (1988) の指摘からも妥当性のあるものと思われる。

(i) *Giorgio è — dottore.* (Renzi 1988: 402)

(ii) *Giorgio è il dottore.* (Renzi 1988: 403)

*Giorgio be*_{Sg.3.Pres} (the) doctor

(i) の無冠詞 *dottore* で現れるコピュラ文は、*Giorgio* の医者としての知識や能力があることを述べた文であり、述語位置に AP が現れているものと類似していると Renzi (1988) では指摘されている。一方、(ii) の *il dottore* という DP は、主語 *Giorgio* との同一化を示す機能があるとされる。

²⁰⁾ Pereltsvaig (2008: 13) で示されている述語 DP₂ に具格が標示されるコピュラ構造は、[_{FP} Spec *byt'* [_{DP} DP₁ DP₂]] というものである。

²¹⁾ Matushansky (2000) では、このような述語の主格は、主語の主格との格一致 (case agreement) の結果であると説明されている。

²²⁾ ロマンズ語などの格を明示的に示さない言語の述語 DP は、基本的に欠格 DP_{def} であると思われる。

(38) [_{VP} Spec *byt'* [_{PredP} Subject **Pred**⁰ [_{NP/AP} (_{Instr})/(_{DP}_{def(Nom)})]]]

このように、普遍的なコピュラ統語構造から二種類の格が標示されることに関して、本稿では、PredP 補部に併合される述語句の格素性の有無が格標示を決定すると考える。

それでは次に、(39) のコピュラ文の派生を具体的に考察してみる。

(39) a. Margarita *byla* *studentka*_(Nom). (= (36a))

b. Margarita *byla* *studentkoj*_(Instr). (= (36b)) (Matushansky 2000: 297)

まず、指定部に主語 DP、補部に述語 NP((39a))と述語 DP_{def}((39b))が併合し、コピュラ動詞 *byt'* が v^0 に投射されて基底構造が生成される。この時に、格素性を持つ述語 NP はコピュラ動詞 *byt'* より具格が付与され、格素性を持たない述語 DP_{def} にはデフォルトの主格が標示される ((40))。

(40) [_{VP} Spec *byt'* [_{PredP} Margarita **Pred**⁰ { [_{NP} *studentkoj*_(Instr)] / [_{DP}_{def} *studentka*_(Nom)] }]]]

その後、主語 DP である *Margarita* が vP の指定部を経由して TP の指定部に繰り上がることにより、T⁰ にある [EPP] 素性により主格が付与される。そして、コピュラ動詞 *byt'* が TP の主要部に編入し主語 DP の「数」・「人称」・「性」の素性²³⁾を照合すると共に、T⁰ の時制素性を照合し *byla* という形態として出力する ((41))。

(41) [_{TP} Margarita_{i(Nom)} *byla*_(Pl, 3, F, Past) [_{VP} *t_i* ~~*byt'*~~ [_{PredP} *t_i* **Pred**⁰ { [_{NP} *studentkoj*_(Instr)] / [_{DP}_{def} *Studentka*_(Nom)] }]]]]]

次に、述語に主格が標示される現在時制コピュラ文を検討してみる。

(42) Margarita ϕ *studentka*.

Margarita student_{Nom}

「マルガリータは学生だ」

(Matushansky 2000: 297)

(42) のような文は、述語の *studentka* を NP と取るか、DP_{def} と取るかで意味が異なるとされる。Geist (2008: 83) は、述語を NP と取ると “the situation described is temporally bounded” というようなアスペクトを伴うような意味になるという指摘を行っている²⁴⁾。このような現在時制コ

²³⁾ ロシア語には、ロマンス語では見られない「性」の素性に一致する動詞形態がある。

²⁴⁾ このようなロシア語における述語 NP/DP_{def} の相違は、スペイン語におけるコピュラ動詞 *ser/estar* の使い分けに類似しているように思われる。

ピュラ文における異なる意味の表出は、結合する述語句の違いから生じるものであり、異なる統語構造からの派生に因るものとは考えにくいと思われる。

ここで、(42)の格標示された基底構造を示すと(43a)のようになる。

- (43) a. [_{vP} Spec ϕ [_{PredP} Margarita **Pred**⁰ [_{NP/DPdef} studentka_[Nom]]]]
 b. [_{TP} Margarita_[Nom] [_{vP} *t_i* ϕ [_{PredP} *t_i* **Pred**⁰ [_{NP/DPdef} studentka_[Nom]]]]]]

現在時制の場合、NP/DP_{def}のいずれの述語であっても、 v^0 に出現するコピュラ動詞 ϕ が格付与能力を持たないためデフォルトの主格が標示される。この後、主語DPが vP の指定部を經由してTPの指定部に繰り上がることにより、 T^0 にある[EPP]素性により主格が付与されて派生が収束(convergence)する((43b))。

次に、＜認識動詞＋小節＞の小節構造についてであるが、2.2.2節で述べたように、ロシア語では認識動詞 *sčitat'* の補部に埋め込まれた小節にはコピュラ動詞 ϕ が出現する。この場合、(44b)のように、小節述語が主格で標示されるものは容認されず、(44a)のように義務的に具格が付与される。

- (44) a. Ja sčitaju [Gumilëva \emptyset xorošim poètom]. (= (18a))
 I consider_{Sg.1.Pres} Gumilëv_{Acc} good poet_{Inst}
 b. *Ja sčitaju [Gumilëva \emptyset xorošij poètjyutu].
 I consider_{Sg.1.Pres} Gumilëv_{Acc} good poet_{Nom} (Matushansky 2000: 291)

このように小節述語に具格が付与されていることから、この小節述語はDP_{def}ではなくNPということになり、このNPに具格を付与しているのがコピュラ動詞 ϕ ということになる²⁵⁾。(44a)の小節構造においては、コピュラ動詞 ϕ が述語NPである *xorošij poètjyutu* に具格を付与することによって *xorošim poètom* となる((45a))。その後、主語DPが vP の指定部に移動することによって派生が収束する((45b))。

- (45) a. [_{vP} Spec \emptyset [_{PredP} Gumilëva **Pred**⁰ [_{NP} xorošim poètom_[Instr]]]]
 b. [_{vP} Gumilëva: \emptyset [_{PredP} *t_i* **Pred**⁰ [_{NP} xorošim poètom_[Instr]]]]]]

最後に、コピュラ動詞の形式ごとに、基底構造から述語に格が付与される派生までを一般化して示しておく。

²⁵⁾ 小節述語に具格が義務的に付与されるということは、ロシア語の小節構造における述語は、NPしか併合しないということを意味する。

(46) a. 定形節

- i. 現在時制 : $[_{VP} \text{Spec } \phi \quad [_{PredP} \text{Subject } \mathbf{Pred}^0 \quad [_{NP/DP/Def} \text{Predicate}_{[Nom]}]]]]$
 ii. 過去時制 : $[_{VP} \text{Spec } \text{byt}' \quad [_{PredP} \text{Subject } \mathbf{Pred}^0 \quad \{[_{NP} \text{Predicate}_{[Instr]}]/[_{DP/Def} \text{Predicate}_{[Nom]}]\}]]]$
 b. 非定形節 : $[_{VP} \text{Spec } \emptyset \quad [_{PredP} \text{Subject } \mathbf{Pred}^0 \quad [_{NP} \text{Predicate}_{[Instr]}]]]$

3.2. アラビア語

アラビア語では、現在時制のコピュラ動詞が ϕ 、過去時制のコピュラ動詞が *KWN* で示される。述語 DP_2 の格については、現在時制ではデフォルトの主格が標示され、過去時制においてはコピュラ動詞 *KWN* から対格が付与される。これらの基底構造から述語に格が標示された状態を一般化して記述すると (47) のようになる。

- (47) a. 現在時制²⁶⁾ : $[_{VP} \text{Spec } \phi \quad [_{PredP} \text{Subject } \mathbf{Pred}^0 \quad [_{Predicate}_{[Nom]}]]]]$
 b. 過去時制 : $[_{VP} \text{Spec } \text{KWN} \quad [_{PredP} \text{Subject } \mathbf{Pred}^0 \quad [_{Predicate}_{[Acc]}]]]]$

コピュラ文を (47) のような基底構造から派生させていく場合、アラビア語では表層で現れる VSP(Verb - Subject - Predicate) と SVP(Subject - Verb - Predicate) という異なる語順をどのように解決するかという問題に直面する。

(48) a. *kaan-a* Zayd-un muṣallim-an.

$\text{be}_{Sg.3.M.Past} \text{Zayd}_{Nom} \text{teacher}_{Sg.Acc.M}$

(Alharbi 2017: 92)

b. Zayd-un *kaan-a* muṣallim-an.

$\text{Zayd}_{Nom} \text{be}_{Sg.3.M.Past} \text{teacher}_{Sg.Acc.M}$

「ザイドは先生だった」

(Alharbi 2017: 117、一部改変)

(48a) はコピュラ動詞 *kaan* に主語と述語が後続する VSP 語順であり、(48b) はコピュラ動詞 *kaan* が主語に後続する SVP 語順である。このような語順の違いによって主語とコピュラ動詞の一致関係も異なるとされる。

²⁶⁾ Alharbi (2017) では、一つの探索子 (probe) で同時に一つの統語操作を行う Hiraiwa (2001) の多重一致 (Multiple Agree) でコピュラ文に現れる DP の格標示を分析している。現在時制コピュラ文である非動詞文では T⁰ によって多重一致が行われ、過去時制では i⁰ にあるコピュラ動詞 *KWN* で多重一致が行われるという分析である。この考え方は、コピュラ動詞によって「述語への格付与」が行われるとする本稿での主張と大きく異なる。

(49) a. *kaan-a hawulaa'i l-muwazzaf-uuna mashfuul-iina.*

*be*_{Sg.M.Past} *these* *the-employees*_{Sg.3.M.Past.Nom} *busy*_{Pl.M.Acc}

b. *hawulaa'i l-muwazzaf-uuna kaan-u mashfuul-iina.*

these *the-employees*_{Pl.3.M.Past.Nom} *be*_{Pl.3.M.Past} *busy*_{Pl.M.Acc}

「これらの職員は忙しかった」

(竹田 2013: 61)

コンピュータ動詞が主語に先行する (49a) では、コンピュータ動詞 *KWN* が主語の「三人称」・「男性」という素性に一致するのに対して、主語に後続する (49b) では、コンピュータ動詞 *KWN* が「三人称」と「男性」という素性に加えて「複数」という「数」素性にも一致する。

アラビア語のコピュラ文の派生、特に VSP 語順の派生に関しては多くの議論があるが、未だに未解決の領域であると言って良いだろう。古典的な考え方は、Koopman & Sportiche (1991) などが主張する、主語が VP 内に残留するというものであるが、主語が VP の外側に移動していることは多くの事象に見られる。例えば、Aoun et al. (2010) は、モロッコ・アラビア語の否定文において VP の外側にある否定辞が動詞と共に文頭に現れることや、標準アラビア語の存在構造 (existential construction) において TP 指定部にある虚辞 *humaaka* ‘there’ が *kaana* に後続するという現象を挙げ、主語 DP が VP に残留するということを否定している。このことから Aoun et al. (2010) では、主語 DP は VP の外側に移動して VSP 語順が派生されると主張している。その派生は、主語 DP が TP 指定部へ移動すると共に、動詞が TP より高い位置にある機能範疇 FP²⁷⁾ に繰り上がるというものである。しかしながら、もしこの機能範疇 FP への移動が A 移動であれば、主語 DP が TP 指定部に一旦移動し、T⁰ に繰り上がった動詞と一致することになるので、VSP 語順に見られないとされる「数」の一致を説明することができない。また、この移動が TP を経由しない \bar{A} 移動であるとしても、「人称」と「性」の一致がどこで行われるのかが説明できない上に、FP に移動する引き金 (trigger) となるものが何なのかも不明である。

このような主張が十分に納得できる説明になっていないのは、VSP 語順の部分一致と SVP 語順における完全一致の相違を説明できていないという点にあるように思われる。コンピュータ動詞との素性一致は明らかに TP で行われるのであろうが、この非対称的な一致関係は一致が行われるのが TP という一つの場所だけであるということでは説明できないようである。そこで本稿では、この非対照的な一致関係を説明するために、Cardinaletti (2004) で提案されている分離 TP (split TP) という考え方を用いて考察を試みることにする。

(50) *specSubjP specEPP specAgrSP* ... specVP*

(Cardinaletti 2004: 154)

²⁷⁾ Aoun et al. (2010: 71) は、この機能範疇 FP の実態は不明であるが、明らかに CP ではないと述べている。

(50) で示したものは分離した主語位置のカートグラフィーであるが、このカートグラフィーには文法的な主語位置である（従来の TP に近い）AgrSP*²⁸⁾ の前に「叙述の主語」(subject-of-predication) である SubjP がある。このような TP 内に二つの分離した投射があることによって異なるタイプの主語が表層に現れることになる。具体的には、SubjP には DP などの「強い主語」(strong subject) が現れ、AgrSP* には代名詞などの「弱い主語」(weak subject) が出現する。Cardinaletti (2004) では、この AgrSP* は単一の投射ではなく、言語によってさらなる異なった分離投射があるということが指摘されている。このような AgrSP* のさらなる分離投射において、それぞれの ϕ 素性 (ϕ -feature) がその投射位置で素性照合することになる ((51))。

(51) specSubjP spec_{EPP}P specAgrSP* spec??P spec?P specVP (Cardinaletti 2004: 136)

このような AgrSP* の分離投射においても、表層的に異なるタイプの主語がそれぞれの場所に位置する。AgrSP* のすぐ下の ??P には代名詞のような「弱い主語」、その下の ?P では DP のような「強い主語」が出現する。Cardinaletti (2004) では、この AgrSP* の分離投射がそれぞれの ϕ 素性に対応するといった指摘に留まり、具体的な ϕ 素性の順序などは明言していない。このことに関して、Tortora (1999) や Sigurðsson (2000) では、「数」素性より低い位置に「人称」素性が配置されるような構造が提案されている。本稿では、この <「数」素性—「人称」素性> の配置を応用して、アラビア語における VSP 語順での「人称」・「性」の部分一致、SVP 語順での「数」・「人称」・「性」の完全一致を考えてみたい。本稿では、アラビア語における主語位置には、(52) のような主語分離投射があると仮定している。

(52) SubjP AgrSP[Agr_{Num}P Agr_{Pers/Gend}P]

この (52) の主語分離投射を用いて (53) の措定コピュラ文の派生を考えてみる。

- (53) a. Ahmad-u ϕ l-muʕallim-u.
 Ahmad_{Nom} the-teacher_{Nom}
 「アーマッドは先生だ」 (Alharbi 2017: 73)
- b. *kaan-a* Zayd-un muʕallim-an. (= (48a))
 be_{Sg.3.M.Past} Zayd_{Nom} teacher_{Sg.M.Acc} (Alharbi 2017: 92)
- c. Zayd-un *kaan-a* muʕallim-an. (= (48b))
 Zayd_{Nom} be_{Sg.3.M.Past} teacher_{Sg.M.Acc} (Alharbi 2017: 117)

²⁸⁾ AgrSP の後に付されているアスタリスクは反復可能 (iterative) であることを示す。

まず、(53c) の SVP 語順の過去時制コピュラ文の派生は (54) のように示すことができる。

- (54) a. [_{vP} Spec *KWN* [_{PredP} *Zayd Pred*⁰ [_{muṣallim-an}]_[Acc]]]]
 b. [_{AgRPers/GendP} *Zayd-un*_[i(Nom)] *KWN*_[3, M, Past] [_{vP} *t_i* ~~*KWN*~~ [_{PredP} *t_i* *Pred*⁰ [_{muṣallim-an}]_[Acc]]]]]]
 c. [_{AgNumP} *Zayd-un*_[i(Nom)] *kaana*_[Pl, 3, M, Past] [_{AgRPers/GendP} *t_i*_[Nom] ~~*KWN*~~ [_{vP} *t_i* ~~*KWN*~~ ...
 d. [_{SubjP} *Zayd-un*_[i(Nom)] *kaana*_[Pl, 3, M, Past] [_{AgNumP} *t_i*_[Nom] ~~*kaan-a*~~_[Pl, 3, M, Past] [_{AgRPers/GendP} *t_i*_[Nom] ~~*KWN*~~_[3, M, Past] ...

最初に、 v^0 に投射されたコピュラ動詞 *KWN* が述語 DP₂ に対格を付与する ((54a))。この後、主語 DP₁ は vP の指定部を経由して *AgRPers/GendP* の指定部に繰り上がることにより主格が付与される。そして、すでに [Past] の時制照合を行っている²⁹⁾ コピュラ動詞 *KWN* が *AgRPers/GendP* の主要部に編入し、主格を付与された主語 DP₁³⁰⁾ の「人称」と「性」の素性を照合する ((54b))。さらに、主語 DP₁ とコピュラ動詞 *KWN* は *AgNumP* に繰り上がり、コピュラ動詞 *KWN* が「数」の素性を照合することにより完全一致が達成される ((54c))。最後に、主語 DP₁ は「強い主語」なので「叙述の主語」位置である *SubjP* の指定部まで繰り上がり、主要部にコピュラ動詞 *kaana* が移動して派生が収束する³¹⁾³²⁾ ((54d))。

VSP 語順となる (53b) の過去時制コピュラ文の派生は、主語 DP₁ が *AgRPers/GendP* まで繰り上がることにより主格が付与され、コピュラ動詞 *KWN* が *AgRPers/GendP* の主要部に編入し、「人称」と「性」の素性を照合する (55b) までのプロセスは SVP 語順と同じである。

- (55) a. [_{vP} Spec *KWN* [_{PredP} *Zayd Pred*⁰ [_{muṣallim-an}]_[Acc]]]]
 b. [_{AgRPers/GendP} *Zayd-un*_[i(Nom)] *KWN*_[3, M, Past] [_{vP} *t_i* ~~*KWN*~~ [_{PredP} *t_i* *Pred*⁰ [_{muṣallim-an}]_[Acc]]]]]]

Aoun et al. (2010) は、この後、コピュラ動詞 *KWN* が機能範疇 FP に繰り上がると指摘してい

²⁹⁾ Sigurðsson (2000: 89) では、普遍的な定形節における CP 以下の位層 (layer) を (i) のように示している。

(i) Num - Pers - Mood - T - Asp - Voice - v

(i) では、T (時制) は Pers (人称) より低い位置にある。本稿でもこの考え方に従い、派生のプロセスには明記しないが、*AgRPersP* に動詞が移動する前に時制素性はすでに照合されていると考える。

³⁰⁾ Sigurðsson (2000: 94) では、アイスランド語の考察から、「数」素性は最も接近可能な主格と照合すると指摘している。本稿でもこの考えに従い、*AgRPers/GendP* で主格が付与された主語 DP₁ とコピュラ動詞が *AgNumP* に繰り上がる则认为る。

³¹⁾ Ouhalla (1991) は、VSP 語順で現れる主語位置がアラビア語における本来の主語位置であり、SVP 語順となる主語 S は、左方転移 (left-dislocation) で CP 領域へ移動した Topic であると主張している。これに対して、本稿では、SVP 語順で現れる主語は、TP 内にある *AgSP* より高い位置の *SubjP* へ移動すると考えている。

³²⁾ コピュラ動詞 ϕ による現在時制コピュラ文は、SVP 語順の過去時制の派生である (54) と同様、以下のように派生するものと考えられる。

(i) a. [_{vP} Spec ϕ [_{PredP} *Ahmad Pred*⁰ [_{1-muṣallim}]_[Nom]]]]
 b. [_{AgRPers/GendP} *Ahmad*_[i(Nom)] ϕ [_{Pres}] [_{vP} *t_i* ~~ϕ~~ [_{PredP} *t_i* *Pred*⁰ [_{1-muṣallim-u}]_[Nom]]]]]]
 c. [_{SubjP} *Ahmad-U*_[i(Nom)] ϕ [_{AgSP} *t_i*_[Nom] ~~ϕ~~ _[Pres]] [_{vP} *t_i* ~~ϕ~~ [_{PredP} *t_i* *Pred*⁰ [_{1-muṣallim-u}]_[Nom]]]]]]

るが、この指摘が適切であるかどうかをここで検証してみる。

(56) [FP *kaana*_[3, M, Past] [TP *Zayd-un*_[Nom] T⁰ [_{VP} t_i ~~*KWN*~~ [_{PredP} t_i **Pred**⁰ [*muṣalliman*_[Acc]]]]]]

(56)は、コピュラ動詞 *KWN* が \bar{A} 移動で FP に移動したことを示している。この派生であれば、コピュラ動詞 *KWN* が TP を経由しないため、VSP 語順では「数」の素性照合が行われえないということは説明可能である。しかしながら、コピュラ動詞 *KWN* が TP を経由しないということは、「数」以外の「人称」と「性」の照合も行われえないということになるが、実際には、コピュラ動詞は「人称」と「性」の照合を行っている。このことはどのように説明すべきであろうか？ また、コピュラ動詞 *KWN* が機能範疇 FP に移動する引き金となるものは一体何であろうか？

このことを分析するために、まず、主語位置に明示的な虚辞代名詞が併合されている (57) の存在文の派生を考えてみる。

(57) *kaan-a hunaaka Taalib-un fii l-hadiiqati*

*be*_{Sg,3,M,Past} there student_{Nom} in the-garden

「庭に学生がいた」

(Aoun et al. 2010: 70)

Aoun et al. (2010) では、この虚辞代名詞 *hunaaka* が TP の指定部に出現するため、コピュラ動詞が TP より高い位置にある FP に移動しているということを主張しているが、このような CP と TP の間にある FP がどのようなものかについては断言を避けている。しかし、本稿で取り扱っている分離 TP 分析であれば、この CP と TP(AgrSP) の間にあるものは SubjP であることが容易に推察できる。このことから、(57) の構造は (58) のように記述できる。

(58) [_{SubjP} Spec *kaan* [_{AgrNumP} *hunaaka* [_{AgrPers/GendP} *Taalib-un* ...

(58) は (57) のコピュラ動詞、虚辞代名詞、主語 DP₁ を本稿の分離 TP の位置に当てはめたものである。その位置は、主語 DP₁ の *Taalib-un* が AgrPers/GendP の指定部、虚辞代名詞 *hunaaka* が AgrNumP の指定部、コピュラ動詞 *kaan* が SubjP の主要部ということになる。SubjP の指定部には、DP などの「強い主語」が位置する場所であるため、虚辞代名詞 *hunaaka* のような「弱い主語」が SubjP に出現することはない。このことから、「VSP 語順は AgrNumP に「弱い主語」が出現する場合に生じる」ということが指摘できると思われる。

一般的に、アラビア語の VSP 語順のコピュラ動詞は、「数」の一致が起こらず、「人称」と「性」だけが部分一致するというように説明される。しかしながら、人称代名詞が主語である場合、VSP 語順であっても、(59) のように、コピュラ動詞 *KWN* は「数」も含めた完全

一致が行われた形態で現れる。

(59) *kun-ta* *ʔanta* *muʕallim-an*

*be*_{Sg.2.M.Past} *you* *teacher*_{Sg.M.Acc}

「あなたは先生だった」

(Alharbi 2017: 93)

(59)の主語領域の派生を示すと(60)のようになる。

(60)

a. [_{AgrPers/GendP} *ʔanta*_[Nom] *KWN*_[2, M, Past] ...

b. [_{AgrNumP} *ʔanta*_[Nom] *kun-ta*_[Sg. 2, M, Past] [_{AgrPers/GendP} *ʔanta*_[Nom] *KWN*_[2, M, Past] ...

c. [_{SubjP} *kun-ta*_[Sg. 2, M, Past] [_{AgrNumP} *ʔanta*_[Nom] *kun-ta*_[Sg. 2, M, Past] [_{AgrPers/GendP} *ʔanta*_[Nom] *KWN*_[2, M, Past] ...

コピュラ動詞 *KWN* は AgrPers/GendP で「人称」と「性」を照合し ((60a))、 AgrNumP で「数」を照合した後に ((60b))、 SubjP の主要部に繰り上がる ((60c))。この場合の主語人称代名詞 *ʔanta* は「弱い主語」で SubjP に移動することができないため、 AgrNumP に留まることにより VSP 語順ができる。このように、VSP 語順が派生する場合も、コピュラ動詞 *KWN* は AgrNumP に一旦繰り上がり、「数」の素性照合が行われる。このことは、(57)の虚辞代名詞 *hunaaka* が出現する場合も同じであり、コピュラ動詞 *kaana* は AgrNumP において虚辞代名詞 *hunaaka* が持つ「単数」という素性を照合した形態であると言える。従って、アラビア語は、VSP 語順であっても SVP 語順であってもコピュラ動詞 *KWN* は完全一致をすることになる。問題となるのは、VSP 語順の場合にコピュラ動詞 *KWN* がどの主語と一致しているかということにある。

以上のようなことを前提として、ここで主語に DP のような「強い主語」が現れるコピュラ文の派生について考えてみたい。「VSP 語順は AgrNumP に「弱い主語」が出現する場合に生じる」とすると、DP 主語のような「強い主語」が出現する場合の「弱い主語」とは何であろうか？本稿ではこの「弱い主語」が虚辞空主語 *pro_{expl}* であると仮定する。

(61) a. [_{AgrNumP} *pro_{expl}* [_{AgrPers/GendP} DP₁ *KWN*_[Pers, Gend, Past] ...

b. [_{AgrNumP} *pro_{expl}* *KWN*_[Num, Pers, Gend, Past] [_{AgrPers/GendP} DP₁ *KWN*_[Pers, Gend, Past] ...

c. [_{SubjP} Spec *KWN*_[Num, Pers, Gend, Past] [_{AgrNumP} *pro_{expl}* *KWN*_[Num, Pers, Gend, Past] [_{AgrPers/GendP} DP₁ *KWN*_[Pers, Gend, Past] ...

(61a) は、 AgrNumP の指定部に *pro_{expl}* が併合した状態を示している。この時、 AgrPers/GendP で「人称」と「性」の値を付与されたコピュラ動詞 *KWN*_[Pers, Gend, Past] が AgrNumP の主要部に移動し、*pro_{expl}* と「単数」での照合が行われる³³⁾。主語 DP₁ は「強い主語」であるため、 SubjP まで移動する

³³⁾ 虚辞空主語 *pro_{expl}* も虚辞代名詞 *hunaaka* と同様、「三人称・単数」という素性を保持していると考えられる。

ことが可能であるが、経由する必要のある次の高い位置にある AgrNumP の指定部がすでに虚辞空主語 *pro_{expl}* で埋められているため、AgrNumP に移動できず AgrPersP/GendP に留まる ((61b))。この後、コピュラ動詞 *KWN*_[Num, Pers, Gend, Past] は SubjP に繰り上がるが、虚辞空主語 *pro_{expl}* は「弱い主語」であるため AgrNumP に留まる ((61c))³⁴⁾。このように、アラビア語における DP 主語の VSP という基本語順は、AgrNumP に虚辞空主語 *pro_{expl}* が併合し、コピュラ動詞 *KWN* が SubjP へ移動することによって成立する³⁵⁾。

次に、＜認識動詞＋小節＞の小節構造における派生を示しておく。アラビア語の小節構造に関しては、2.2.2節で指摘したように、コピュラ動詞 \emptyset が出現し述語 DP₂ に対格を付与する。(62) の派生は (63) のように示すことができる。

(62) *ʕadad-tu* [Zayd-an \emptyset l-faaʔiz-a]. (= (19))
*consider*_{Sg.1.Past} *Zayd*_{Acc} *the-winner*_{Acc}

(63) a. [_{vP} Spec \emptyset [_{PredP} Zayd Pred⁰ [l-faaʔiz-a_[Acc]]]]
 b. [_{vP} Zayd_i \emptyset [_{PredP} *t_i* Pred⁰ [l-faaʔiz-a_[Acc]]]]

アラビア語の小節構造は、(63a) で示した DP₂ に対格が付与された基底構造から、主語 DP₁ が vP の指定部に移動して派生する (63b)。この後、主節の認識動詞が併合することによって DP₁ に格が付与されるのであるが、このことについては第 4 章で詳細に論述することにする。

最後に、アラビア語におけるコピュラ動詞の形式ごとの基底構造から格が付与された派生までを一般化して示しておく。

(64) a. 定形節
 i. 現在時制 : [_{vP} Spec \emptyset [_{PredP} Subject Pred⁰ [Predicate_[Nom]]]]
 ii. 過去時制 : [_{vP} Spec *KWN* [_{PredP} Subject Pred⁰ [Predicate_[Acc]]]]
 b. 非定形節 : [_{vP} Spec \emptyset [_{PredP} Subject Pred⁰ [Predicate_[Acc]]]]

³⁴⁾ (53b) の派生は以下のように示すことができる。

(i) a. [_{vP} Spec *KWN* [_{PredP} Zayd Pred⁰ [muʕallim-an_[Acc]]]]
 b. [_{AgrPers/GendP} Zayd-un_i[Nom] *KWN*_[3, M, Past] [_{vP} *t_i* ~~*KWN*~~ [_{PredP} *t_i* Pred⁰ [muʕallim-an_[Acc]]]]
 c. [_{AgrNumP} *pro_{expl}* *kaana*_[Sg, 3, M, Past] [_{AgrPers/GendP} Zayd-un_i[Nom] ~~*KWN*~~_[3, M, Past] ...
 d. [_{SubjP} Spec *kaana*_[Sg, 3, M, Past] [_{AgrNumP} *pro_{expl}* ~~*kaana*~~_[Sg, 3, M, Past] [_{AgrPers/GendP} Zayd-un_i[Nom] ~~*KWN*~~_[3, M, Past] ...

³⁵⁾ アラビア語では、AgrNumP への主語 DP の移動による SVP 語順より虚辞空主語の併合による VSP 語順の方が一般的である。これは、Chomsky (2015: 317) が移動と併合操作が可能な場合、移動より併合が好まれると言及していることにも一致している。

4. 倒置構造における「主述の一致」

これまで、コピュラ動詞の役割が「倒置構造の派生」・「時制の標示」・「述語への格付与」であることを指摘し、通言語学的小節構造の基底構造に「主述の結合」が行われる PredP という統語位置があることを示した。また、この基底構造からコピュラ文が派生していくプロセスにおいて「主述の一致」が「指定部－主要部」関係により行われるということを確認した。この「主述の一致」は、指定部に移動してきた主語 DP₁が持つφ素性を TP の主要部に編入されるコピュラ動詞に値付与することによって行われる。しかしながら、多くの言語で倒置構造におけるコピュラ動詞は、表層上、主語位置にある DP₂ではなく、基底構造で主語位置にある DP₁と一致する³⁶⁾。

- (65) a. *Germ.* Unser größtes Problem *sind* die Mafiabosse.
 b. *It.* Il nostro problema più grande *sono* i boss mafiosi.
 c. *Sp.* Nuestro mayor problema {*son/?es*} los capos mafiosos. (Arche 2018: 24)
 d. *Por.* O nosso maior problema *são* os chefes mafiosos.
 e. *Rum.* Cea mai mare problemă a noastră *sunt* șefii mafioți.

(65) で取り上げた言語において、コピュラ動詞は基底構造における主語 DP₁の「三人称複数」という素性と一致しており、表層で主語位置にある述語 DP₂の「三人称単数」という素性とは一致しない。このことは、このような言語の倒置構造では、表層の主語位置の DP₂と「指定部－主要部」関係による一致が行われていないということを示している。そこで、本節では、ロマンス語³⁷⁾、ロシア語、アラビア語における倒置構造の派生のプロセスから、コピュラ動詞が主語 DP₁とどのように一致するのかを考察していく。

4.1. ロマンス語

Heycock (2012) は、倒置コピュラ文においてコピュラ動詞に後置する DP₁が Focus の情報構造を持つということを述べている。Rizzi (2016) や Shlonsky & Rizzi (2018) では、この Focus

³⁶⁾ 英語やアラビア語のコピュラ動詞は、(65) で取り上げた言語とは異なり、移動してきた述語 DP₂のφ素性と一致する。アラビア語については4.3節で詳述するので、ここでは(65)の英語に相当する(i)の例を挙げておく。

(i) Our biggest problem is the mafia bosses. (Arche 2018: 24)

また、フランス語においては、(ii)のように、コピュラ動詞は「数」で DP₂と一致するが「人称」とは一致しないということを参考までに紹介しておく。

(ii) Le coupable, c'est toi.
 the culprit ce-be.Sg.3.Pres you 「罪人は君だ」 (Heycock 2012: 213)

³⁷⁾ フランス語の倒置コピュラ文は、*Jean, c'est mon ami.* のように指示代名詞 *ce* が挿入される構造として現れる。これは単純に倒置された構造を取る他のロマンス語とは異なる構造と考えられるため、本稿ではフランス語を除外して議論を進めていくことにする。

の統語位置を Belletti (2004) が提案する vP/VP 内にある FocP であるとし ((66))、倒置コピュラ文の Focus となる述語 DP₁がこの FocP に移動するとしている。

(66) [TP [FocP [vP [PredP]]]]³⁸⁾

(66) の統語構造で (65b) のイタリア語の倒置コピュラ文の派生を考えると、まず、(67a) の基底構造から主語 DP₁が FocP に移動する ((67b))。

(67) a. [vP Spec essere [PredP i boss mafiosi Pred⁰ [il nostro problema più grande]]]

b. [FocP i boss mafiosi_{i[Foc]} [vP Spec essere [PredP t_i Pred⁰ [il nostro problema più grande]]]]

Shlonsky & Rizzi (2018) では、この時点で AgrSP とその c 統御 (c-command) 内にある FocP に移動した名詞要素で探索関係 (probing relation) が確立し、この探索関係に基づいて「人称」と「数」の ϕ 素性と時制素性が照合し、DP₁に主格³⁹⁾が付与されるとしている⁴⁰⁾⁴¹⁾。そして、FocP は指定部にある DP₁が主要部の [Foc] 素性を満足させるので基準凍結 (critical freezing)⁴²⁾する位置であると Shlonsky & Rizzi (2018) では指摘されている。このため、(67b) の段階で FocP の指定部にある DP₁の *i boss mafiosi* はこれ以上の統語操作を受けないことになる。ここまでの派生プロセスを示したものが (68) となる。

(68) [TP T⁰ [FocP i boss mafiosi_[Foc, Nom] [vP Spec sono_[Pl, 3, Pres] [PredP t_i [il nostro problema più grande]]]]]

この後に述語 DP₂が TP へと移動して倒置構造ができるのであるが、DP₂が直接 FocP に移動した DP₁を飛び越えて TP の指定部へ移動することは相対的最小性条件 (Relativized Minimality

³⁸⁾ カテゴリーは本稿で使用しているものに置き換えている。

³⁹⁾ DP₁の格標示に関しては、通言語学的に主格であることが多い (フランス語は非接語形式の強勢形人称代名詞)。

(i) a. *Germ.* Das sind wir/*uns.

this be_{Pl,3,Pres} we/*us

(Sigurðsson 2006: 30)

b. *Fr.* Les criminels, ce sont eux.

the criminals ce-be_{Pl,3,Pres} they

c. *It.* La vittima sono io.

the victim be_{Sg,1,Pres} I

英語では *It is I* という DP₁の主格標示は文語的であり、一般的には *It is me* という対格標示となる (Sigurðsson 2006: 31)。

⁴⁰⁾ ロマンズ語ではこのような探索関係に基づいて動詞の一致が行われるが、DP₁との一致が行われない英語では「指定部-主要部」関係を確立する場合にのみ一致が生じる (Shlonsky & Rizzi 2018)。

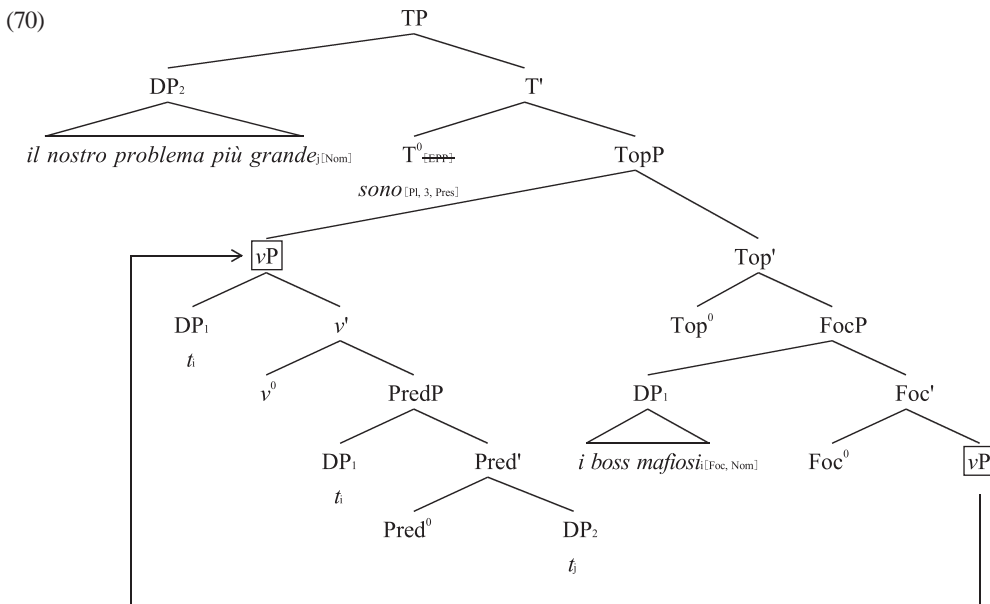
⁴¹⁾ このことは、DP₁が FocP に移動した時点で、[EPP]素性を持つ TP が併合されているということの意味する。

⁴²⁾ 基準凍結とは、“A phrase meeting a criterion is frozen in place” (Rizzi 2006: 112) という一つの統語原理である。

Condition) に違反することになる。このため Shlonsky & Rizzi (2018) では、TP 内の叙述構造の移動 (movements of predicative structure) である *smuggling*⁴³⁾ という方法で小節全体を DP₁ がある FocP の前に移動させている。Shlonsky & Rizzi (2018) ではこの *smuggling* 移動の着地点について明確な場所を示していないが、本稿では、Jayaseelam (2001: 39)⁴⁴⁾ の言う「FocP の上の繰り返し可能な TopP」の指定部が *smuggling* する着地点であると仮定する。この TopP の指定部に *vP* が *smuggling* 移動した派生は (69) のように示せる。

(69) [TP T⁰ [TP [TopP [vP Spec *sono* [Pl, 3, Pres] [PredP *t* [il nostro problema ...]]] Top⁰ [FocP *i boss mafiosi* [Foc, Nom]]]]]

この *smuggling* という操作により、相対的最小性条件に違反することなく、叙述構造の中の DP₂ を TP の指定部に繰り上げることが可能となる。この後、コピュラ動詞が TP の主要部に移動し、DP₂ が TP の指定部に繰り上がることになるが、[EPP] 素性は DP₁ とすでに照合し終わっているため、DP₂ にはデフォルトの主格が標示される ((70))。



このような倒置コピュラ文の派生は、(65) で取り上げたドイツ語・イタリア語・スペイン語・ポルトガル語・ルーマニア語のような言語に共通する派生であると思われる。その派生

⁴³⁾ Collins (2005) が受動文の派生において相対的最小性条件の違反を回避するために提唱した操作。

⁴⁴⁾ Jayaseelam (2001) は、この TP 内 TopP によってドイツ語などにみられる節内スクランピングにおける定性制約を説明することが可能であるとしている。

は、DP_iがvPの上にあるFocPに移動することによりコピュラ動詞との一致が完了し、その後、smugglingによって小節全体をFocPの前に移動させるものである。

4.2. ロシア語

3.1.節では、ロシア語の過去時制コピュラ文において、述語に異なる二種類の格標示が表出し、具格で標示されるものが格素性を有するNPであり、主格を標示するものが格素性を持たないDP_{def}であるという指摘を行った。倒置構造においては、表層上、主語位置に出現する主語に具格が付与されていることから、この二つの述語NPと述語DP_{def}の内、倒置構造を容認するのは述語NPだけということになる。このことに関して、Matushansky (2000: 289)にも”only an Instrumental-marked predicate can be moved by \bar{A} -movement”という同様の指摘が見られ、(71)の例を挙げている⁴⁵⁾。

- (71) a. V 17^{om} veke samoj rasprostranënoj mebel'ju byl sunduk.
 in 17th century most widespread furniture_{Instr} be_{Sg.3.M.Past} chest
 「17世紀において最も普及した家具がチェストだった」
- b. *V 17^{om} veke samaja rasprostranënnaja mebel' byl sunduk.
 in 17th century most widespread furniture_{Nom} be_{Sg.3.M.Past} chest (Matushansky 2000: 290)

(71)における述語NP/DP_{def}は、本稿で主張するTP内FocPという \bar{A} 位置に移動するものであるが、この場合、(71a)のような具格DPである*samoj rasprostranënoj mebel'ju*は許されるが、(71b)のような主格DP_{def}である*samaja rasprostranënnaja mebel'*は容認されない⁴⁶⁾。このようなことから、倒置コピュラ文は(72)で示す基底構造⁴⁷⁾から派生することになる。

- (72) a. 現在時制: [_{vP} Spec ϕ [_{PredP} Subject **Pred**⁰ [_{NP} Predicate_[Nom]]]]]
 b. 過去時制: [_{vP} Spec *byl'* [_{PredP} Subject **Pred**⁰ [_{NP} Predicate_[Instr]]]]]

ここでロシア語の現在時制と過去時制の倒置コピュラ文を再掲する。

⁴⁵⁾ Matushansky (2000) は、このような構造を Topicalization (話題化) と呼んでいるが、これは本稿での倒置コピュラ文に該当する。

⁴⁶⁾ 主格で標示された述語DP_{def}が倒置しているような例が僅かながら見られる。

(i) Pod'exavšie *byli* Napoleon i dva ad'jutanta.

Approaching.ones_{Nom} be_{Pl.3.Past} Napoleon and two adjutants

「接近しているのはナポレオンと二人の副官だった」

(Partee 2010: 40)

Mikkelsen (2005) は、このような不定DP_{def}の倒置が旧談話的トピック (discourse-old topics) で容認されるとしている。

⁴⁷⁾ (72)の基底構造には、便宜上、述語に格標示を付している。

- (73) a. Ubijca ϕ Raskol'nikov. (= (14c))
 murderer_{Nom} ϕ Raskolnikov (Geist 2008: 97)
- b. Ubijcej byl Raskol'nikov. (= (14d))
 murderer_{Instr} be_{Sg.3,M,Past} Raskolnikov (Geist 2008: 96)

(73a) は、現在時制の倒置コピュラ文であり、倒置した述語 NP が *ubijca* という主格で標示されている。また、(73b) は、この現在時制を過去時制にしたものであるが、この場合、倒置した述語 NP は *ubijcej* という具格標示となる。ここで (73) の倒置コピュラ文の派生を示してみると、それぞれ (74) と (75) のようになる。

- (74) a. [_{vP} Spec ϕ [_{PredP} Raskol'nikov **Pred**⁰ [ubijca_[Nom]]]]]
 b. [_{TP} **T**⁰ [_{FocP} Raskol'nikoVi_[Foc, Nom] [_{vP} Spec ϕ [_{Pres}] [_{PredP} *t*_i **Pred**⁰ [ubijca_[Nom]]]]]]]
 c. [_{TP} **T**⁰ [_{TopP} [_{vP} Spec ϕ [_{Pres}] [_{PredP} *t*_i **Pred**⁰ [ubijca_[Nom]]]]]] **Top**⁰ [_{FocP} Raskol'nikoVi_[Foc, Nom] ___]]]
 d. [_{TP} Ubijca_[Nom] ϕ [_{Pres}] [_{TopP} [_{vP} Spec ~~ϕ~~ [_{PredP} *t*_i **Pred**⁰ [*t*]]]]] **Top**⁰ [_{FocP} Raskol'nikoVi_[Foc, Nom] ___]]]
- (75) a. [_{vP} Spec byl' [_{PredP} Raskol'nikov **Pred**⁰ [ubijcej_[Instr]]]]]
 b. [_{TP} **T**⁰ [_{FocP} Raskol'nikoVi_[Foc, Nom] [_{vP} Spec byl'_[Sg.3,M,Past] [_{PredP} *t*_i **Pred**⁰ [ubijcej_[Instr]]]]]]]
 c. [_{TP} **T**⁰ [_{TopP} [_{vP} Spec byl'_[Sg.3,M,Past] [_{PredP} *t*_i **Pred**⁰ [ubijcej_[Instr]]]]]] **Top**⁰ [_{FocP} Raskol'nikoVi_[Foc, Nom] ___]]]
 d. [_{TP} Ubijcej_[Instr] byl'_[Sg.3,M,Past] [_{TopP} [_{vP} Spec byl'_[Sg.3,M,Past] [_{PredP} *t*_i **Pred**⁰ [*t*]]]]] **Top**⁰ ...

現在時制の倒置コピュラ文においては、(74a) の基底構造から主語 DP が FocP に移動することにより、**T**⁰ と FocP との探索関係が確立し、主語 DP である *Raskol'nikov* に主格が付与され、コピュラ動詞 ϕ が時制素性を照合する ((74b))。その後、smuggling で *vP* が *TopP* の指定部に移動し ((74c))、さらに、述語 NP が *TP* 指定部に繰り上がる ((74d))。

同様に過去時制においても、述語 NP に具格が付与された基底構造から ((75a))、主語 DP が FocP に移動する。次に、*TP* が併合することにより **T**⁰ と FocP との探索関係が確立し、*DP* に主格が付与されると共に、コピュラ動詞 *byl'* が主語 DP の ϕ 素性と時制素性 [Past] を照合する ((75b))。その後、smuggling で *vP* が *TopP* の指定部に移動し ((75c))、さらに、述語 NP が *TP* 指定部に繰り上がりコピュラ動詞 *byl'* が *TP* の主要部に移動する ((75d))。

このように、ロシア語の倒置コピュラ文の派生は、主語 DP が *vP* の上にある FocP に移動することにより **T**⁰ と FocP との探索関係が確立し、*DP* に主格が付与されると共に、コピュラ動詞が ϕ 素性と時制素性を照合する。続いて、smuggling によって *vP* を *TopP* の指定部に移動させた後、述語 NP が *TP* 指定部に繰り上がりコピュラ動詞が *TP* の主要部に移動して派生が収束する。この派生は、過去時制における述語 NP への具格付与を除くとロマンス語と同じものになる。

4.3. アラビア語

アラビア語の倒置コピュラ文は、ロマンス語やロシア語とは異なり、コピュラ動詞は倒置して主語位置にある述語 DP₂と一致する。

(76) *kaan-a sabab-u l-muʃkil-at-i t^c-t^cullaab-a*

*be*_{Sg.3.M} *cause*_{Sg.3.M.Nom} *the-problem*_{Sg.F.Gen} *the-student*_{Pl.M.Acc}

「その問題の原因は学生たちにある」

(Alharbi 2017: 93)

(76) の倒置コピュラ文では、コピュラ動詞 *kaana* は DP₁ である *t^c-t^cullaab-a* の「複数・男性」という素性ではなく、倒置して主語位置にある DP₂ の *sabab-u* の「単数・男性」という素性に一致している。また、ロシア語においては具格が主語位置に倒置した DP₂ に付与されていたが、アラビア語においては、対格が DP₁ に付与されている。

ここで、ロマンス語やロシア語とは異なる派生が行われていると思われるアラビア語の過去時制倒置コピュラ文を (77) の文で考察してみる。

(77) *kaan-a l-faaʔiz-u Fahad-an.*

*be*_{Sg.3.M.Past} *the-winner*_{Nom} *Fahad*_{Acc}

(Alharbi 2020: 29)

(78) a. [_{vP} Spec *KWN* [_{PredP} *Fahad* **Pred**⁰ [*l-faaʔiz*]]]

b. [_{FocP} *Fahad* [_{vP} Spec *KWN* [_{PredP} *t_i* **Pred**⁰ [*l-faaʔiz*]]]]

(78a) の基底構造から、まず、FocP が併合され、主語 DP₁ が FocP の指定部に移動する ((78b))。アラビア語は、英語と同様⁴⁸⁾、TP と移動してきた DP の「指定部—主要部」関係が確立される場合にのみ一致が行われるため、ロマンス語やロシア語のようにこの時点で T⁰ と主語 DP₁ との照合は起こらない。表層において、この FocP に移動してきた主語 DP₁ は対格標示されているのであるが、ここで、この対格の付与がどのようにして行われているかという問題が生じる。主語 DP₁ に対格を付与しているのは間違いなくコピュラ動詞 *KWN* であろうが、この時点でコピュラ動詞 *KWN* は主語 DP₁ に対格を付与する位置にはない。また、コピュラ動詞 *KWN* が基底位置である vP の主要部に留まっているのであれば、述語 DP₂ に対格が付与されているはずである。このことを解決するために、本稿では、主語 DP₁ が FocP に移動するときに、コピュラ動詞 *KWN* も FocP の主要部に移動するということを提案したい。アラビア語では、v⁰ にあるコピュラ動詞 *KWN* が FocP が併合されると述語 DP₂ に対格を付与せず FocP 主要部に移動すると考えてみよう。主語 DP₁ は、値未付与の格素性を持つ DP であるた

⁴⁸⁾ 英語における倒置コピュラ文においても、表層的に主語位置に生じる DP₂ と動詞は一致する。

(i) *The mafia bosses are our biggest problem.*

(Arche 2018: 24)

(i) においてコピュラ動詞 *are* は、DP₂ の *the mafia bosses* という「複数」素性と一致している。

め、何らかの格を付与されなければならない。ロシア語のように T^0 との探索関係が確立するような言語であれば主格が標示されるが、アラビア語は T^0 との探索関係が確立しない言語であるため、主語 DP_1 が主格を標示することはできない。このままでは主語 DP_1 が値未付与になってしまうため、対格を付与する [v] 素性を持つコピュラ動詞 KWN が $FocP$ の主要部に移動してくる。このことにより、値未付与の主語 DP_1 とコピュラ動詞 $KWN_{[v]}$ が局所的 (local) となり主語 DP_1 に対格が付与される。

(79) [$FocP$ Fahad-ani_[Foc, Acc] $KWN_{[v]}$ [vP Spec ~~$KWN_{[v]}$~~ [$PredP$ t_i $Pred^0$ [l-faaʔiz]]]]

↑

このような仕組みを構築することにより、表層構造での対格標示される主語 DP_1 と、主格標示される DP_2 の説明が可能となる⁴⁹⁾。続く派生においては、他の言語では vP が $FocP$ に smuggling するのに対して、アラビア語では $PredP$ が smuggling で $TopP$ の指定部に移動する ((80a))。そして、 $Agr_{Pers/Gend}P$ が併合し、述語 DP_2 が指定部に、コピュラ動詞 KWN が主要部に繰り上がる⁵⁰⁾。この時点で、述語 DP_2 とコピュラ動詞 KWN が「指定部—主要部」関係となることによって述語 DP_2 に主格が標示されると共に、コピュラ動詞 KWN が「人称」・「性」の素性と時制素性を照合する ((80b))。この後、コピュラ動詞は、指定部に虚辞空主語 pro_{expl} が生じる $Agr_{Num}P$ で「数」の素性を照合して、さらに $SubjP$ に繰り上がる ((80c))。

(80) a. [$Agr_{Pers/Gend}P$ [EPP] [$TopP$ [$PredP$ t_i $Pred^0$ [l-faaʔiz]]] $TopP^0$ [$FocP$ Fahad-ani_[Foc, Acc] KWN [vP Spec ~~KWN~~ ___]]]]

b. [$Agr_{Pers/Gend}P$ l-faaʔiz-u_[Nom] $KWN_{[3, M, Past]}$ [$TopP$ [$PredP$ t_i $Pred^0$ [t_j]]] ~~KWN~~ [$FocP$ Fahad-ani_[Foc, Acc] ~~KWN~~ ...

c. [$SubjP$ Spec $kaana$ _[Sg, 3, M, Past] [$Agr_{Num}P$ pro_{expl} ~~$kaana$~~ _[Sg, 3, M, Past] [$Agr_{Pers/Gend}P$ l-faaʔiz-u_[Nom] ~~KWN~~ _[3, M, Past] ...

以上のように、アラビア語の倒置コピュラ文の派生は、 $FocP$ に移動してきたコピュラ動詞 KWN が DP_1 に対格を付与した後、 $PredP$ を $TopP$ の指定部の位置に smuggling 移動させる。この後、 DP_2 が $Agr_{Pers/Gend}P$ に繰り上がり主格が付与される。そして、コピュラ動詞 KWN は $Agr_{Pers/Gend}P$ で DP_2 と「人称」・「性」、 $Agr_{Num}P$ で pro_{expl} と「数」の素性を照合した後、 $SubjP$ まで繰り上がり派生が収束することになる⁵¹⁾。

⁴⁹⁾ 英語の *It is me*. における *me* の対格標示も同じような仕組みで派生しているものと考えられる。

⁵⁰⁾ smuggling される $PredP$ は、 TP 内 $TopicP$ の指定部に位置するため、 $FocP$ にあるコピュラ動詞 KWN はこの $TopP$ の主要部を経由して $Agr_{Pers/Gend}P$ に繰り上がり主格が付与されると考えられる。

⁵¹⁾ 現在時制のコピュラ動詞 ϕ は格付与能力を有しないが、デフォルト格である主格を述語に標示させる能力は持っていると考えられる。従って、現在時制倒置コピュラ文の派生は、コピュラ動詞 ϕ が $FocP$ に移動し DP_1 へ主格を標示させるところは異なるが、それ以外は過去時制と同じプロセスで派生する。

4.4. <認識動詞+小節>の小節における倒置構造

<認識動詞+小節>の小節における倒置構造は、脱コピュラ現象が見られるロシア語とアラビア語に見られる。

まず、ロシア語の (81) の倒置構造の派生を考えてみる。

(81) Ja sčitala [xorošim poètom \emptyset Gumilëva]. (= (18b))
 I consider_{Sg.1.Past} good poet_{Instr} \emptyset Gumilëv_{Acc} (Matushansky 2000: 292)

(82) a. [_{vP} Spec \emptyset [_{PredP} Gumilëva **Pred**⁰ [_{NP} xorošim poètom_[Instr]]]]
 b. [_{vP} sčitat' [_{FocP} Gumilëva_[Foc, Acc] [_{vP} Spec \emptyset [_{PredP} *t*_i **Pred**⁰ [_{NP} xorošim poètom_[Instr]]]]]]
 c. [_{vP} sčitat' [_{TopP} [_{vP} Spec \emptyset [_{PredP} *t*_i **Pred**⁰ [_{NP} xorošim poètom_[Instr]]]]]] **TopP**⁰ [_{FocP} Gumilëva_[Foc, Acc] ___]]]

(82a) の述語 NP に具格が付与された基底構造から、主語 DP である *Gumilëva* が FocP に移動する。続いて、主節動詞 *sčitat'* が併合し、例外的格標示 (exceptional case marking) により主語 DP に対格が標示される ((82b))。このように、主語 DP の例外的格標示は、倒置構造を形成する vP の smuggling 移動の前に主節動詞が併合することによって行われることになる。その後、vP が smuggling により TopP の指定部へ移動し、小節構造の格関係が「具格 (NP) – 対格 (DP)」という標示となる ((82c))。

アラビア語の小節の倒置構造は、ロシア語とは異なり、アラビア語の倒置コピュラ文と同じような派生を行うと考えられる。例えば、(83) の小節の倒置構造は (84) のように派生する。

(83) šadad-tu [l-faaʔiz-a \emptyset Zayd-an]. (= (19b))
 consider_{Sg.1.Past} the-winner_{Acc} \emptyset Zayd_{Acc} (Alharbi 2017: 84)

(84) a. [_{vP} Spec \emptyset [_{PredP} Zayd **Pred**⁰ [l-faaʔiz]]]
 b. [_{vP} šadadtu [_{FocP} Zayd-an_[Foc, Acc] \emptyset [_{vP} Spec \emptyset [_{PredP} *t*_i **Pred**⁰ [l-faaʔiz]]]]]
 c. [_{vP} šadadtu [_{TopP} [_{PredP} *t*_i **Pred**⁰ [l-faaʔiz-a_[Acc]]]] **TopP**⁰ [_{FocP} Zayd-an_[Foc, Acc] \emptyset [_{vP} Spec \emptyset ___]]]]

(84a) の基底構造から、主語 DP₁ である *Zayd* とコピュラ動詞 \emptyset が FocP に移動し、主語 DP₁ に対格を付与する。この時、主節動詞 *šadadtu* が併合するが、すでに主語 DP₁ に格が付与されているので主語 DP₁ に格を付与することはない ((84b))。その後、PredP が smuggling により TopP の指定部へ移動し、例外的格標示により述語 DP₂ に対格が標示される ((84c))。このように、アラビア語の「対格 (DP₂) – 対格 (DP₁)」の格標示は、述語 DP₂ が例外的格標示に因るものであり、主語 DP₁ がコピュラ動詞 \emptyset から付与されたものとなる。

このように<認識動詞+小節>の小節の倒置構造は、各言語の倒置コピュラ文と同じような派生プロセスによって形成される。

5. 結論

本稿では、コピュラ機能が「倒置構造の派生」、「時制の標示」、「述語への格付与」、「主述の結合」、「主述の一致」というものの総体であるという立場に立ち、第2章で、このコピュラ機能の中でコピュラ動詞が担う統語的役割が「倒置構造の派生」、「時制の標示」、「述語への格付与」であることを指摘した。

この中で注目すべきは、脱コピュラ現象が生じるロシア語やアラビア語に見られる音形のない二種類のゼロコピュラ動詞である。このようなゼロコピュラ動詞は、音形のあるコピュラ動詞が持つ統語的役割の一部を欠く。現在時制コピュラ動詞 ϕ は、「倒置構造の派生」と「時制の標示」という統語的役割は有するが、「述語への格付与」能力は持たない⁵²⁾。また、ゼロコピュラ動詞 \emptyset は、「倒置構造の派生」と「述語への格付与」の統語的役割を持つが、「時制の標示」という役割は持たない。このように、いずれのゼロコピュラ動詞も統語的役割の一部を欠いているが、コピュラ構造を成立させることにおいてはゼロコピュラ動詞は十分に機能していると言える。それは、完全動詞が保持しない、コピュラ動詞が独自に持つ「倒置構造の派生」という統語的役割を有するからである。コピュラ動詞の統語的役割として挙げた「時制の標示」は、コピュラ動詞が T^0 の持つ時制素性を照合して、それをコピュラ動詞に標示させているだけであり、これは完全動詞にも同じく生じるものである。また、「述語への格付与」については、元々述語への格付与を行う v^0 の位置にコピュラ動詞が併合して述語に格付与を行っているに過ぎず、「述語への格付与」はコピュラ動詞の統語的役割というよりもむしろ v^0 自体が持つ機能であると言える。このような意味で、コピュラ動詞独自の統語的役割は「倒置構造の派生」だけであり、ゼロコピュラ動詞により倒置構造が派生するということは、ゼロコピュラ動詞がコピュラ構造を生成するのに十分に機能していると言える。

第2章でとりあげた英語・ロマンス語・ロシア語・アラビア語におけるコピュラ動詞の形式と時制の関係をここでまとめておく (<表2>)。

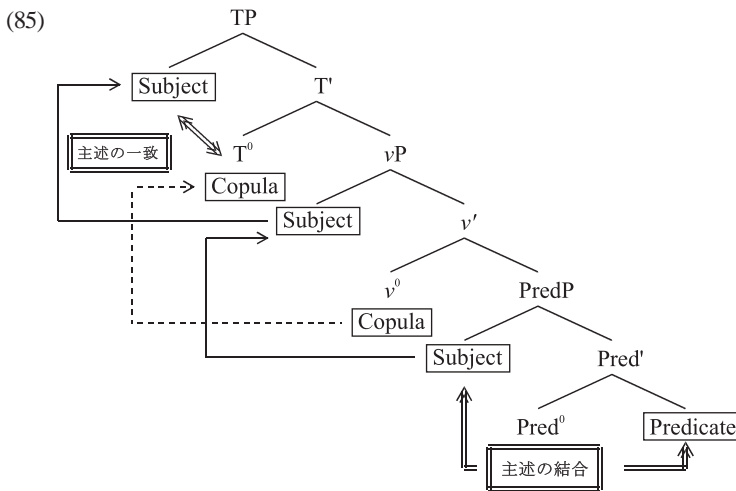
<表2：コピュラ動詞の形式・時制・格付与⁵³⁾>

		英語	ロマンス語	ロシア語	アラビア語
定形節	現在時制	<i>be</i>	<i>ESSE</i>	ϕ	ϕ
	現在時制			<i>byt'</i> [CASE]	<i>KWN</i> [CASE]
非定形節		<i>be</i>	-	\emptyset [CASE]	\emptyset [CASE]

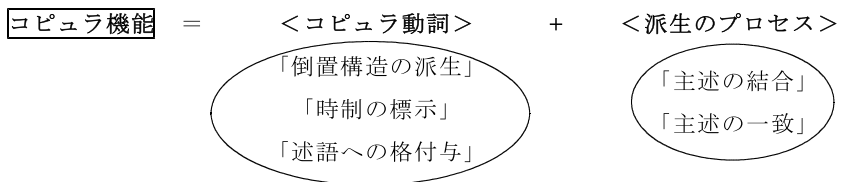
⁵²⁾ コピュラ動詞 ϕ は「述語への格付与」は行わないが、述語にデフォルトの主格を標示させる能力はあると考えられる。

⁵³⁾ 明示的に述語への格付与能力を有するコピュラ動詞に [CASE] という素性を付している。

第3章では、コピュラ動詞が担わないコピュラ機能である「主述の結合」と「主述の一致」がコピュラ文の派生に関係するものであるということを考察した。本稿では、コピュラ動詞が位置する vP の下に「主述の結合」が行われる $PredP$ を配置した $\langle TP - vP - PredP \rangle$ というコピュラ構造を設定している。このため、「主述の結合」は、コピュラ動詞が併合される vP ではなく、 $PredP$ における主語と述語の「結合」という派生のプロセスにおいて実現する。また、「主述の一致」は、 TP 指定部に繰り上がる主語 DP と TP 主要部に編入されるコピュラ動詞の「指定部-主要部」関係によって生じる。この意味において、「主述の一致」も派生のプロセスの中で生じるものであると言える。この「主述の結合」と「主述の一致」というコピュラ機能が行われる場所を樹形図の中に示すと (85) のようになる。



続いて、第3章で論じたコピュラ機能がコピュラ動詞によるものと、派生のプロセスから生じるものの総体であることを示すと<図2>のようになる。



<図2：コピュラ機能の総体>

第3章ではさらに、各言語におけるコピュラ文が、本稿で設定した通言語学的なコピュラ統語構造から、どのような派生プロセスを経た結果、表層上多様な形式を示すかについて分析した。ここで、ロマンス語・ロシア語・アラビア語の過去時制指定コピュラ文の派生を一般化して示してみると (86) のようになる。

(86) 基底構造 : [_{vP} Spec Copula [_{PredP} Subject **Pred**⁰ [Predicate]]]

a. ロマンズ語

[_{TP} Spec Subject_i[_{Nom}] ESSE_[Num, Pers, Tense] [_{vP} ~~ESSE~~_{[PredP *t*_i **Pred**⁰ [Predicate]]]]]}

b. ロシア語

[_{TP} Spec Subject_i[_{Nom}] byt'_[Num, Pers, Gen, Tense]

[_{vP} *t*_i ~~byt'~~_{[PredP *t*_i **Pred**⁰ {[_{NP} Predicate_[Instr]]/[_{DPdef} Predicate_[Nom]]}]]]}

c. アラビア語

[_{SubjP} Spec ~~KWN~~_[Num, Pers, Gen, Tense] [_{AgrNumP} *pro*_{expl} ~~KWN~~_[Num, Pers, Gen, Tense] [_{AgrPers/GendP} Subject_i[_{Nom}] ~~KWN~~_[Num, Pers, Gen, Tense]

[_{vP} *t*_i ~~KWN~~_{[PredP *t*_i **Pred**⁰ [Predicate_[Acc]]]]]]}

コピュラ文は、通言語学的な基底構造である [_{vP} Spec Copula [_{PredP} Subject **Pred**⁰ [Predicate]]] から派生する。ロマンス語は、vP で基底生成されたコピュラ動詞 *ESSE* が T⁰ に編入すると共に、PredP の指定部にある Subject が vP 指定部を経由して TP 指定部に繰り上がることによって派生が収束する。

ロシア語は、基本的にはロマンス語の派生と同じであるが、Predicate に格素性を有する NP が併合された場合は具格が付与され、格素性を持たない DP_{def} が併合された場合は主格が標示されるといった Predicate の格標示の区別があるという点でロマンス語と異なる。

アラビア語は、 \emptyset 素性を動詞に付与する位置が分離する TP で素性が付与される点で他の言語と異なる。PredP 指定部に DP などの「強い主語」が併合された場合、まず、Subject とコピュラ動詞が Agr_{Pers/Gend}P に繰り上がり、動詞に「人称・性」の素性を付与する。続いて、Agr_{Num}P では指定部に *pro*_{expl} が生じるため Subject は Agr_{Pers/Gend}P に残留し、コピュラ動詞だけが Agr_{Num}P に繰り上がり「単数」という素性が付与される。最後に、SubjP には「弱い主語」である *pro*_{expl} は繰り上がることができず、コピュラ動詞だけが SubjP の主要部に移動して派生を収束させる。

ロマンス語の派生を基本として、ロシア語とアラビア語固有の派生のプロセスを提示すると (87) のようになる。

(87) a. ロシア語

- ・ 述語に NP と DP_{def} の区別がある。
- ・ 述語 NP に具格が付与される。

b. アラビア語

- ・ 述語 DP に対格が付与される。
- ・ 主語位置が <SubjP - Agr_{Num}P - Agr_{Pers/Gend}P> という分離 TP の構造となる。

(87) のような言語が独自に持つ仕組みにより、表層上多様なコピュラ文が表出するのであるが、本稿では、通言語学的なコピュラ基底構造から、言語によって (87) のような仕組みが働きその言語独自の措定コピュラ文が表出するということを論証した。

最後に、通言語学的なコピュラ基底構造から倒置構造がどのように派生するかということ を第4章で考察した。ロマンス語・ロシア語・アラビア語の過去時制倒置コピュラ文の派生を一般化して示すと (88) のようになる。

(88) 基底構造 : [_{VP} Spec Copula [_{PredP} Subject Pred⁰ [Predicate]]]

a. ロマンズ語

[_{TP} Predicate]_j[Nom] ESSE [_{Num, Pers, Tense}] [_{TopP} [_{VP} Spec ESSE [_{Num, Pers, Tense}] [_{PredP} *t*_i Pred⁰ [_t]]] Top⁰
[_{FocP} Subject]_i[Foc, Nom] ___]]]

b. ロシア語

[_{TP} Predicate]_j[Instr] byt' [_{Num, Pers, Gen, Tense}] [_{TopP} [_{VP} Spec byt' [_{Num, Pers, Gen, Tense}] [_{PredP} *t*_i Pred⁰ [_t]]] Top⁰
[_{FocP} Subject]_i[Foc, Nom] ___]]]

a. アラビア語

[_{SubjP} Spec KWN [_{Num, Pers, Gen, Tense}] [_{AgNumP} pro_{expl} ~~KWN~~ [_{Num, Pers, Gen, Tense}] [_{AgPers/GenP} Predicate]_i[Nom] ~~KWN~~ [_{Num, Pers, Gen, Tense}]
[_{TopP} [_{PredP} *t*_i Pred⁰ [_t]]] ~~KWN~~ [_{FocP} Subject]_i[Foc, Acc] KWN [_{VP} Spec ~~KWN~~ ___]]]]]]

ロマンス語とロシア語の倒置構造は、Subject が TP 内 FocP に移動し、この移動した Subject と T⁰ との探索関係が確立する。そして、この探索関係に基づいてコピュラ動詞が φ 素性と時制素性を照合し、Subject が主格を標示する。その後、*vP* が TP 内 TopP の指定部に smuggling 移動して、Predicate とコピュラ動詞が TP に繰り上がり派生が収束する。ロシア語がロマンス語と異なる点は、ロシア語には Predicate に明示的な格標示 (具格) があるということである。

これに対して、Subject が TP 内 FocP に移動しても T⁰ との探索関係が確立しないアラビア語は、Subject の格素性を満足させるためにコピュラ動詞が FocP の主要部に移動する。このことから、TP 内 TopP の指定部への smuggling は PredP が移動することになる。

倒置コピュラ文における各言語の派生のプロセスを提示すると (89) のようになる。

(89) a. ロマンズ語

- FocP に移動した Subject と T⁰ との探索関係が確立し、Subject が主格標示する。
- *vP* が smuggling 移動する。

b. ロシア語

- FocP に移動した Subject と T⁰ との探索関係が確立し、Subject が主格標示する。
- Predicate はコピュラ動詞 *byt'* から具格が付与される。

- ・ vP が *smuggling* 移動する。
- c. アラビア語
- ・ $FocP$ に移動した **Subject** と T^0 との探索関係が確立せず、「主述の一致」は「指定部－主要部」関係によって行われる。
 - ・ **Subject** は $FocP$ に繰り上がったコピュラ動詞 *KWN* から対格が付与される。
 - ・ **Predicate** は「指定部－主要部」関係によって主格が標示される。
 - ・ $PredP$ が *smuggling* 移動する。

倒置コピュラ文の派生において、ロマンス語・ロシア語とアラビア語が異なるのは、**Subject** と T^0 との探索関係が確立するかどうかというパラメーター (parameter) の違いであり、基本的には通言語学的な基底構造から同一のプロセスを経て倒置構造が派生していることになる。

以上のように、本稿では、コピュラ機能がどのようなものかということをも明確にし、通言語学的なコピュラ基底構造から各言語のコピュラ文の派生がどのように説明されるかということをも分析した。今後は、ロシア語やアラビア語に出現する代名詞的要素の派生がどのように行われるかということや、本稿で示した主張が言語系統の異なる日本語などにも適用できるのかといったことを課題として、コピュラ機能の通言語学的研究の確立に向けて研究を進めていきたい。

参考文献

- Alharbi, Bader Yousef (2017) *The Syntax of Copular in Arabic*, Dissertation, University of Wisconsin Milwaukee.
- (2020) “The Pronominal Element in Arabic Copular Clauses,” *International Journal of English Linguistics* 10(4), 21–33.
- Alotaibi, Ahmad S. (2017) *The Copula in Arabic: Description and Analysis*, Dissertation, University of Essex.
- Aoun, Joseph, Elabbas Benmamoun & Dominique Sportiche (1994) “Agreement, Word Order, and Conjunction in Some Varieties of Arabic,” *Linguistic Inquiry* 25(2), 195–220.
- Aoun, Joseph, Elabbas Benmamoun & Lina Choueiri (2010) *The Syntax of Arabic*, Cambridge University Press.
- Arche, María J., Antonio Fábregas & Marín Rafael (2019) “Main Questions in the Study of Copulas,” in Arche, María J., Antonio Fábregas & Marín Rafael (eds.) *The Grammar of Copulas across Languages*, Oxford University Press, 1–30.
- Bailyn, John Frederick (2012) *The Syntax of Russian*, Cambridge University Press.
- Baker (2003) *Lexical Categories: Verbs, Nouns, and Adjectives*, Cambridge University Press.
- Belletti, Adriana (2001) “‘Inversion’ as Focalization,” in Hulk, Afake & Jean-Yves Pollock (eds.) *Subject Inversion in Romance and the Theory of Universal Grammar*, Oxford University Press, 60–90.
- (2004) “Aspects of the Low IP Area,” in Rizzi, Luigi (ed.) *The Structure of CP and IP: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 2*, Oxford University Press, 16–51.
- Bruening, Benjamin (2002) “Raising to Object and Proper Movement,” Ms., *University of Delaware*, Draft, submitted to *Linguistic Inquiry*. Printed February 21, 2002.
- Butt, John, Carmen Benjamin, & Antonia Moreira Rodríguez, (2018) *A New Reference Grammar of Modern Spanish 6th Edition*, Routledge.

- Cardinaletti, Anna (2004) "Towards a Cartography of Subject Positions," in Rizzi, Luigi (ed.) *The Structure of CP and IP: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 2*, Oxford University Press, 115–165.
- Cardinaletti, Anna & Maria Teresa Guasti (1995) "Small Clauses: Some Controversies and Issues of Acquisition," in Cardinaletti, Anna & Maria Teresa Guasti (eds.) *Syntax and Semantics: Small Clauses 28*, Academic Press, 1–23.
- Carnie, Andrew (2021) *Syntax: A Generative Introduction, Fourth Edition*, Wiley Blackwell.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris.
- (1999) "Derivation by Phase," in Kenstowicz, Michael (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, MIT Press, 1–52.
- (2015) *The Minimalist Program, 20th Anniversary Edition*, MIT Press.
- Collins, Chris (2005) "A Smuggling Approach to the Passive in English," *Syntax* 12(4), 285–323.
- den Dikken, Marcel (2006) *Relators and Linkers: The Syntax of Predication, Predicate Inversion, and Copulas*, The MIT Press.
- Geist, Ljudmila (2008) "Predication and Equation in Copular Sentences: Russian vs. English," in Comorovski, Ileana & Klaus von Heusinger (eds.) *Existence: Semantics and Syntax*, Springer, 79–115.
- Geist, Ljudmila & Joanna Blaszczak (2000) "Kopulasätze mit den pronominalen Elementen to/eto im Polnischen und Russischen", *ZAS Papers in Linguistics* 16, 115–139.
- Goto, Sayaka (2014) "Two Types of Accusative Subjects in Japanese," *Japanese/Korean Linguistics* 23, 1–10.
- Guasti, Maria Teresa & Luigi Rizzi (2002) "Agreement and Tense as Distinct Syntactic Positions," in Cinque, Guglielmo (ed.) *Functional Structure in DP and IP: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 1*, Oxford University Press, 167–194.
- Heycock, Caroline (2012) "Specification, Equation, and Agreement in Copular Sentences," *Canadian Journal of Linguistics/Revue canadienne de linguistique* 57(2), 209–240.
- Higgins, Roger (1979) *The Pseudo-cleft Construction in English*, Garland.
- Hiraiwa, Ken (2001) "Multiple Agree and the Defective Intervention Constraint in Japanese," *MIT Working Papers in Linguistics* 40, 67–80.
- Jayaseelan, K. A. (2001) "IP-internal Topic and Focus Phrases," *Studia Linguistica* 55(1), 39–75.
- Jones, Michael Allan (1996) *Foundations of French Syntax*, Cambridge University Press.
- Koopman, Hilda & Dominique Sportiche (1991) "The Position of Subjects" *Lingua* 85, 211–258.
- Kuno, Susumu (1976) "Subject Raising," in Shibatani, Masayoshi (ed.) *Syntax and Semantics Volume 5: Japanese Generative Grammar*, Academic Press, 17–49.
- Matushansky, Ora (2000) "The Instrument of Inversion: Instrumental Case in the Russian Copula," *Proceedings of the 19th West Coast Conference on Formal Linguistics*, 288–301.
- Mikkelsen, Line (2005) *Copular Clauses: Specification, Predication and Equation*, John Benjamins.
- Moro, Andrea (1997) *The Raising of Predicates: Predicative Noun Phrases and the Theory of Clause Structure*, Cambridge University Press.
- Ouhalla, Jamel (1991) *Functional Categories and Parametric Variation*, Routledge.
- Partee, Barbara H. (2010) "Specification Copular Sentences in Russian and English", *Russian in Contrast, Oslo Studies in Languages* 2(1), 25–59.
- Pereltsvaig, Asya (2001) *On the Nature of the Intra-Clausal Relations: A Study of Copular Sentences in Russian and Italian*, Dissertation, McGill University Montréal.
- (2008) *Copular Sentences in Russian: A Theory of Intra-Clausal Relations*, Springer.
- Poletto, Cecilia, (2000) *The Higher Functional Field: Evidence from Northern Italian Dialects*, Oxford University Press.
- Pustet, Regina (2003) *Copulas: Universals in the Categorization of the Lexicon*, Oxford University Press.
- Radford, Andrew (2004) *English Syntax: An Introduction*, Cambridge University Press.
- Renzi, Lorenzo (1988) "L'Articolo," in Renzi, Lorenzo (ed.) *Grande grammatica italiana di consultazione, vol. 1*, Il Mulino, 357–424.
- Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," in Haegeman, Liliane (ed.) *Elements of Grammar: Handbook in Generative Syntax*, Springer, 281–337.

- (2006) “On the Form of Chains: Critical Positions and ECP Effects”, in Cheng, Lisa Lai-Shen & Norbert Corver (eds.) *WH-Movement Moving on*, The MIT Press, 97–133.
- (2016) “Notes on Labeling and Subject Positions,” in di Dimentico, Elisa, Cornelia Hamann & Simona Matteini (eds.) *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, John Benjamins, 15–46.
- Roy, Isabelle & Ur Shlonsky (2019) “Aspects of the Syntax of *ce* in French copular sentences,” *The Grammar of Copulas across Languages*, Oxford University Press, 153–169.
- Shlonsky, Ur & Rizzi, Luigi (2018) “Critical Freezing in Small Clauses and the Cartography of Copular Constructions,” in Hartmann, Jutta, Marion Jäger, Andreas Kehl, Andreas Konietzko & Susanne Winkler (eds.) *Freezing: Theoretical Approaches and Empirical Domains*, De Gruyter, 29–65.
- Sigurðsson, Halldór Ármann (2000) “The Locus of Case and Agreement,” *Working Papers in Scandinavian Syntax* 65, 65–108.
- (2006) “The Nom/Acc Alternation in Germanic,” in Hartmann, Jutta M. & László Molnárfi (eds.) *Comparative Studies in Germanic Syntax*, John Benjamins, 13–50.
- Tortora, Christina M. (1999) “Agreement, Case, and *i*-subjects,” *Proceedings of the North East Linguistic Society* 29, 1–12.
- 上野貴史 (2020) 「名詞述語文の小節構造分析：英語・イタリア語・フランス語の場合」, 『ニダバ』 49号, 11–20.
- 竹田敏之 (2013) 『アラビア語表現とことんトレーニング』, 白水社.
- 永野隆童・上野貴史 (2022) 「コピュラ文に出現する代名詞要素：アラビア語・ヘブライ語・ロシア語・ポーランド語の場合」, 『ニダバ』 51号, 41–59.